

四十周年記念誌

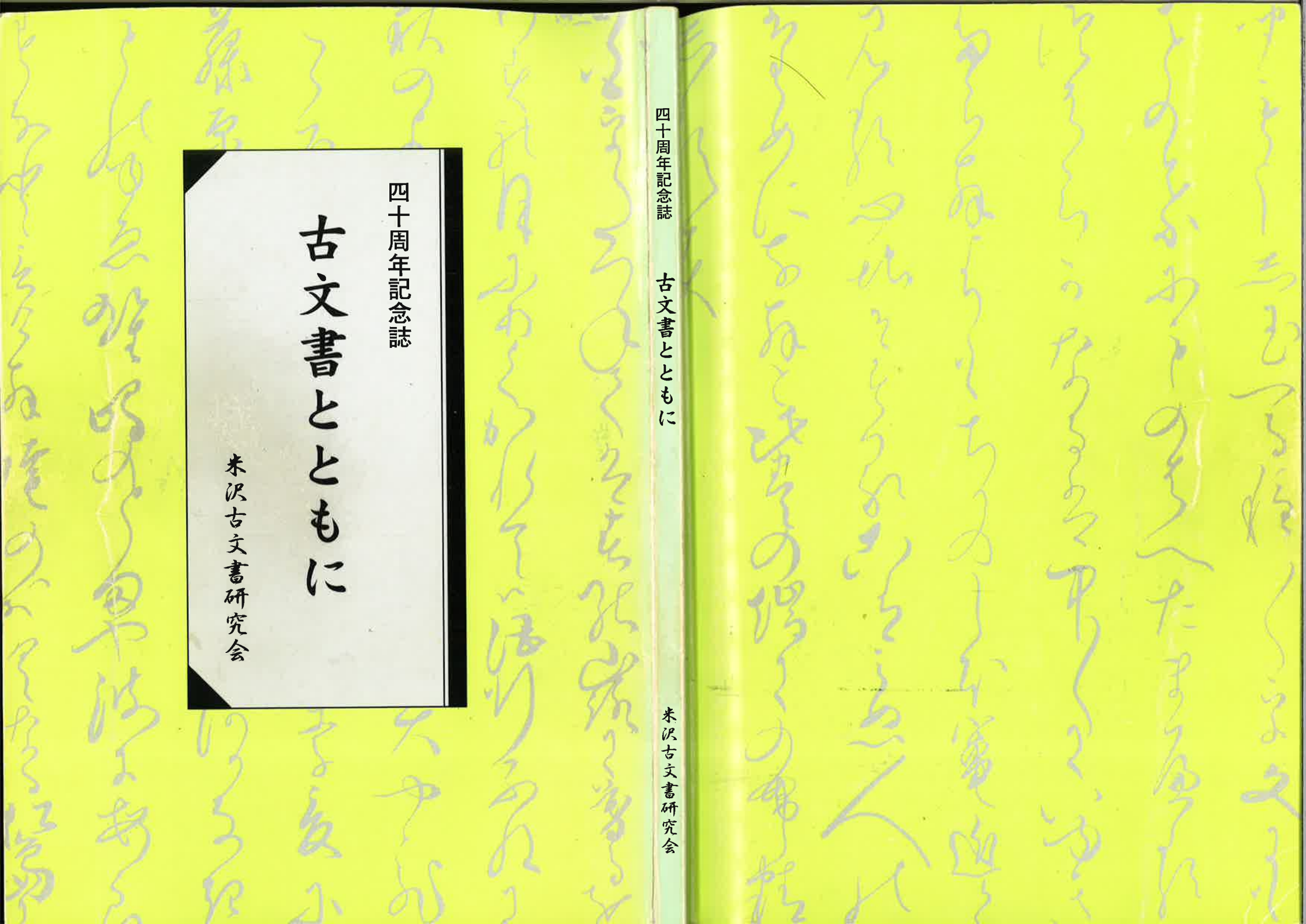
古文書とともに

朱沢古文書研究会

四十周年記念誌

古文書とともに

朱沢古文書研究会





受付



講師 渡辺理絵氏



受講者

米沢古文書研究会 四十周年記念講演会

四十周年記念誌

古文書とともに

米沢古文書研究会

記念誌刊行のご挨拶

会長 遠藤綺一郎

今回の創立四十周年の記念出版は、書物の復刻をしない代わりに、記念誌を作ることに致しました。充実したものを、と念じておりましたが、おかげさまで、講師・会員・元会員・関係者の方々の絶大なご協力と、編集委員の方々の骨身を惜しまぬご努力により、立派なものが出来上がりましたことを、衷心より感謝申し上げます。

皆様にとりましてこの記念誌が、思い出のよき伴侶となり、後々の会員や関係の方々にも、あってよかったと思われるような資料となりますことを、祈念いたしております。

30人



上杉顧問

長井古文書研究会様

遠藤会長



祝賀会会場

米沢古文書研究会 四十周年祝賀会

目次

表紙／「松島日記」市立米沢図書館所蔵
口絵写真：記念行事

記念誌刊行のご挨拶

会長 遠藤綺一郎

四十周年記念行事報告

1

記念行事次第

四十周年祝賀会のご挨拶

会長 遠藤綺一郎

祝 辞

長井古文書研究会 会長

五十嵐俊榮

講演会・祝賀会 風景スケッチ

斎藤 武

記念講演 米沢城下絵図にみる武士の暮らし

茨城大学講師

渡辺 理絵

四十周年に寄せる

12

米沢古文書研究会の発展を願って

顧問 上杉 虎雄

すべて是れ好縁なり

元講師 菊池 伸之

書状を読む楽しさ―蟹の正体は？―

講師 青木 昭博

会員・元会員からの寄稿

19

古文書研究会の想い出

井形 朝良 思い出すままに

岩槻 代寿

古研とわたし

植木 伸子 高橋素子さんのこと

遠藤綺一郎

笹野観音境内での芋煮会

大石 英一 古文書との出会い

小野 榮

怠け者の「あこがれ」

金田 祐作七 古き良き日々・杉浦日向子こぼれ話

川口 雅子

古文書とわたし

木村 喜雄 会への参加の愉しみ

近野 均

古文書と私

齋藤 佳子 雑 感

佐藤美保子

入会十年に想う

佐藤 與七 古文書との関り

山王堂初雄

親子二代、お世話になって

下平 忠正七 初級講座に参加して

鈴木 清子

古文書と私

角屋由美子 古文書のめり込みの始め

高橋 昭夫

古文書研究会40周年によせて

高橋 和子元 開設四十周年を迎えて思うこと

高橋 豊七

懐かしい人達

高橋 淑子 思うがままに

中川 正昭

創立四十周年記念に寄せて

仁科 春七 偶 感

芳賀 勝助七

「米沢古文書研究会」と出会って

本間 とみ 古文書との出会いと感動

山岸 久悦

五人組寄合帳にみる米沢藩窮乏の歴史

米野 一雄 初級講座の思い出

和田 節子

故高橋素子さんの在りし日の文章

61

古文書研究会と下平先生（「置賜文化」第七十二号 S 57・12）

高橋 素子

記録に偲ぶ

64

古文書研究会記録（抜粋）

岩槻 代寿

米沢古文書研究会 四十周年記念行事報告

H18 (2006)

記念講演会

日時 十月二十一日(土)
午後一時～
場所 西部コミュニケーションセンター

演題

「米沢城下絵図にみる

武士の暮らし」

講師 茨城大学講師 渡辺理絵氏

共催 市立米沢図書館
入場 無料

祝賀会

日時 十月二十一日(土)
午後二時四十分～
場所 ホテルサンルート

祝賀会次第

1. 開会のあいさつ
2. 会長あいさつ
3. 祝辞
長井古文書研究会
会長 五十嵐俊榮氏
4. 乾杯
5. 祝宴
6. 万歳三唱
7. 閉会のあいさつ

研修旅行の思い出

「吉良さん」への熱き思い (「芳文」一三三九号 H11・8・1)

鎌倉 花の寺吟行

史跡めぐり 上杉景勝公・直江兼続公 生誕の地を訪ねて

研修旅行の思い出

最近三か年の旅行に参加して

本間 とみ
齋藤 武
米野 一雄
佐藤由美子
伊藤 なみ

米沢古文書研究会の四十年

古文書研の四十年

○勉強した古文書一覽 ○講師一覽

○顧問・役員一覽 ○会員数の推移

○年会費の推移 ○平成十八年度事業

○ミニ講演会一覽 ○研修旅行一覽

○会員名簿(平成十八年度現在)

○米沢古文書研究会会則

遠藤綺一郎

諸新聞等に掲載された会に関する記事や紹介

四十周年祝賀会ご挨拶

会長 遠藤 綺一郎

今日ここに、顧問、講師の方々、友好団体の皆様、かつてお仲間として机を並べた懐かしい元会員の方々とともに、私ども米沢古文書研究会の会員一同相集い、創立四十周年をお祝い出来まことは誠に喜ばしく、また有り難いことと存じます。四十年とはよく続いたものとも思います。

それにつけても偲ばれますのは、この会を創立し、導いてこられた先人の方々の、情熱とご努力のかずかずでございます。

当時上杉家の家職であられた今泉亨吉先生とその親友の下平才次先生とが、市立米沢図書館にお願ひされ、昭和三十七年、米沢図書館主催の第一回「古文書解読講座」が、福島大学の小林清治先生を講師にお迎えして開かれました。それがきっかけとなつ

て、今泉、下平両先生が中心となり、当時の和田文益館長さんのお計らいで、お濠端にあった旧米沢図書館で、第一回の勉強会の開かれたのが昭和四十一年七月、それより引き続いて、今年四十周年を迎えたわけでございます。

下平、今泉両先生が、文字通り会の中心となつて、尽くされたご恩は、私どもの忘れえぬところで、また当初からお二人を助けられた長谷部善作先生や高橋素子さんのご活躍も忘れられません。それに図書館長和田先生のご好意とご援助、その後館長さんは代々替わられました。が、図書館にはずっと会の事務局を置いていただいております。何かにつけて便宜を計っていただいております。日頃感謝致しております。

そして小林清治先生のご恩を忘れることはできません。古文書解読講座の講師として四十年の間、毎年二日間（最後の数年こそ一日間でしたが）ご指導を賜わり、多くの会員がお蔭を蒙りました。先生のご指導、先生の読み方が即、私どものお手本でありました。

長井古文書研究会との交流も有り難いことと思っております。早く芳賀会長さんの時から、会長はじめ何人もの方々が、こちらにも入つてともに勉強、啓発してくださり、こちらからも長井の会員にもなつてお世話になつた方々がございます。今後もどうか宜しくお願い申し上げる次第でございます。

その後、会の長期にわたる安定期を齎らされた前会長上杉先生、長らく講師をしてくださった林泉寺の和尚様の菊池先生はじめ、歴代講師の方々、私どもの会が今日を迎えられましたのも、こういう方々のおかげでございますし、またいちいちお名前は挙げませんが、この会で勉強してこられた元会員の皆様のご熱意のおかげでもあります。そしてさらに申しますと、先人の精神を受け継いで、楽しんで

いでそしんでいる現在の会員も、少し自分たちをも誉めてやつてよいのではないのでしょうか。

実は問題も抱えております。それは、古文書の宝庫ともいべき米沢に在りながら、ご時世のためか、会員数が伸び悩んでいることで、何とか工夫して会員を増やしたく思っております。ともあれ今日は、四十年続いた喜びにひたつて、ご参会の皆様とともに、存分に祝いたく存じます。拙い言葉ではございますが、これをもってご挨拶と致します。有難うございました。

祝 辞

長井古文書研究会 会長 五十嵐 俊 榮

この度、米沢古文書研究会におかれましては創立四十周年を迎えられましたこと、誠にお目出度うございます。心からお祝いを申し上げます。

この記念すべき祝賀会にお招きを頂きまして有難うございました。厚くお礼を申し上げます。

米沢古文書研究会様からは、長井古文書研究会及び会員が大変お世話になって参りました。長年にわたるご交誼に心から感謝を申し上げる次第でございます。

米沢古文書研究会様におかれましては、四十年の長きにわたり数多くの資料の調査研究に心を尽くされ、会員各位には知識を深められ、また会としては地域文化のために多大の貢献をしておりますこと、

本当に素晴らしいことと存じます。心から敬意を表する次第でございます。

古文書を紐解くことは趣味として楽しむだけでなく、趣味の域を越えて生甲斐とも感じております。また先人の心に触れる事ができますことも大きな魅力と思っております。

今回の栄えある式典を機会にこれからもより一層のご交誼をお願い致します。

米沢古文書研究会の会員皆様のご健勝と会のご発展、ご活躍をお祈り申し上げます。お祝いの詞と致します。

林間に酒を暖め紅葉を焼く 白居易の詩にふさわしい秋晴れの好天に恵まれた十月二十一日、講演会場の西部コミセンには、既に会長はじめ植木さん、機材係の寛喜君が来ておられた。早速受付の案内机を準備し、スクリーン、マイク、プロジェクターなどの整備を終え来場者を待った。続々と二階の会場に詰めかける。午後一時、いよいよ開始……。

佐藤由美子さんの進行よろしく、やがて会場が薄暗くなり演題と講師が投影され、カメラマンのフラッシュが光る。

—米沢城下絵図にみる

武士の暮らし—講師の、若々しい茨城大の渡辺理絵先生の紹介が遠藤会長から話された。

米沢の昔の町や家並、人びとが懐かしく思い出され、郷土の古文書研究会に相応しい内容で、聴衆六十余名、皆感銘していた模様であった。

次は祝賀会場のホテルサンルートへ車で移動。四階会場の入り口には懐かしい方々が待ち受けておられた。午後二時四十分、吾妻嶺の紅葉を愛でる佐藤副会長の開会挨拶、由美子さんの歯切れのよい司会、落ち着

四十周年記念行事 講演会・祝賀会 風景スケッチ

赤いワインのグラスで乾杯し、楽しい雰囲気につつまれたひとときが流れた。

記念撮影をし、祝宴に入る。

年配の方から若い新会員まで、遠く小国や長井からの人々と多士済々の面々がそれぞれの盃を交わし、フラッシュを浴びながら談笑で湧き立った。

賑やかな中に小野さんの万歳三唱、そして山王堂さんの閉会の辞で、五十年の再会を期し、会を閉じた。陰で色々な準備交渉をしてくださった多くの方々のご協力に感謝しながら……。

(斎藤 武)

米沢城下絵図にみる武士の暮らし

茨城大学講師 渡 辺 理 絵

1 はじめに

現在の米沢市は、江戸時代初期に上杉氏によって計画・建設された城下町を母胎として発展している。過去に幾度かの大火に見舞われながらも、街のあちらこちらに城下町時代の家並や街路が残っている。

米沢に限らず、江戸時代初期は、全国的に城下町の建設ラッシュであった。城郭を中心として、主として町人地、寺社地、職人町、武家地などが画定された。その中でもっとも広大な面積を占有したのが、武家地である。そもそも城下町建設の主目的の一つは、武家の城下集住にあった。知行地において居住生活している武士を城下町に移すことで、士と農とといった身分制度の徹底をはかるとともに、土着勢力

を一掃させるねらいがあったと言われる。したがって、いずれの城下町も、武家地は徹底した屋敷割りとなされ、城郭を守護するように武家屋敷が配置されたのである。無論、江戸も同様である。

武家地に確保された武家屋敷の数は、元禄期の米沢では三〇〇〇戸を超える。そこでは、家長たる米沢藩士とともに、その家族や召使い、下人などが居住していたのである。しかし、割りあてられた家は、現代と同じように時代とともに老朽化し、また火災によって焼失した例もある。その場合の補修費は、自費であった。「御家」の継承を重んじていた武士が、居住地としての「家屋敷」をどのように維持してきたのか、本発表は、この点に着目しながら、豊富に

残る米沢城下絵図を通じて検討したい。

2 米沢城下絵図の史料吟味

米沢には、各戸に住人名を記載した絵図が一五点現存し、作成年代で区分すると寛永・承応・天和・元禄・享保・明和・文化期といったおよそ一七〇年間にわたる。したがって、断続的ではあるが、近世初期から後期までの城下町に住んだ住人の移動を追跡することができる。このうち、史料調査によって、研究の目的に適した絵図として承応二年（一六五三）、元禄十三年（一七〇〇）、享保十年（一七二五）、文化八年（一八一）に作製された四点の絵図を選定した。

3 城下町における武士の移動

先述の四点の絵図をもとに、以下の方法で武士の移動を分析した。

まず家臣の家系譜（注1）に記載されている家臣名と承応図に記載されている武士名を照合した。次に承応図と家系譜の両方で確認できた一三〇名の武士の

表1 米沢城下の武家屋敷地の移動数
(対象数130件中)

期 間	年 数	移動数	移動率
承応～元禄	47	40	31%
元禄～享保	25	33	24%
享保～文化	86	53	40%

移動について検討した。表1に示したとおり承応～元禄間（四七年間）に屋敷地を移した例は一三〇件中四〇件であり、調査対象の約三〇％にあたる。次に元禄～享保間（二五年間）の例は三三件で約二四％に相当する。このうち承応～元禄間で屋敷地の移動を確認し、さらに元禄～享保間においても移動がみられた例は一七件であった。享保～文化間（八六年間）で屋敷地を移動した例は五三件確認でき、全体の約四〇％にあたる。このことから、米沢ではすでに近世前期から中期において対象とした武士のおよそ三～四割の家臣に屋敷地の移動が起こっており、中期から後期にかけてもほぼ同程度の移動があったことが明らかに

なった。一般的に、一つの屋敷地を世襲的に利用していたと考えられてきた武士であるが、米沢では近世前期から、屋敷地の移動が高い頻度で起こり、武

家地は流動的な性格を有していたことがわかる。

4 屋敷地の移動理由

本来、武家屋敷は、藩主より各藩士に下賜される拝領地のような性格を有していた。したがって、藩より「家屋敷」を移動するように指示された場合は、その命に従うことが求められた。実際、藩用施設増設のために転居した例や加増に伴って新居をあてがわれた例を確認できる。さらに寛文四年(一六六四)の一五万石削封の際にも大規模な屋敷地の再整備がなされたようである。

ただし、藩より拝領された地所は、厳密に言えば、「屋敷」つまり敷地部分であり(注2)、家屋の支給は、城下町建設期以後は伴わず、家臣自らで建築しなければならなかった。したがって、自費で建設した家屋部分は家臣の資産として認知され、嫡子に受け継がれていくこととなった。このため、家屋が存立する敷地部分も、実際は継承されていくことになった。

「家屋敷」の嫡子継承や家臣負担の家屋建築は、家嫡子として迎えた養子ではなく、他家へ出した実子へ相続させているのである。通常、養子を迎えるということは、その家の継承を担う意味で、俸禄のみならず家屋敷をも後継させることになるが、この例では居住の場の「家屋敷」と「知行」の譲渡が分離して継承されたのである。この背景には、養子縁組にともなう、「見継金」あるいは「土産金」と称する金銭の授受があった。

かつて米沢の郷土について調査した長井政太郎は、天保十五年(一八四四)、一軒に二姓(二つの名字)や三姓を有する家があったことを確認している(注7)。たとえば、玉庭集落には、二〇二名の武家名を確認できるが、実際の戸数は一六八軒であった。戸主数と戸数に三四戸の差が生じたのは、一軒に二姓を有する家が二八戸あり、また三姓を有する家が三軒あったためである。こうした現象は「禄を集める目的で身寄少ない老人を引取り、家族中の一人に其の姓と禄を譲り受けたり」もしくは「名義のみ養子縁組を結んで姓を買ひ集める」者によって誘引されていた(注8)。同氏はこうした例を原方集落の花沢な

屋と拝領者の関係を固定化させ、家屋の価値を高めていくことにつながったと考えられる。その証左として一八世紀以降には、家屋の売買が頻繁に行われたことが判明する。安永期の風聞記録には「(香坂)弥総左衛門主水町へ移りし、いかなる故か、此に住みしも幾許ならずして、保科に売り渡し、(香坂)表町の中条玄順屋敷を買取て移りたり」とある。これに続いて、弥総左衛門は表町の屋敷を婿に譲り、さらにその婿も「表町に住けるか今は山田某と買替して明神堂町へ移りたり」といったように、家臣間において家屋の売買が一般的に行われていた(注3)。このほか、一九世紀前期には、「困窮して家賣払」つた例や(注4)、「家屋敷知行を引当にして借金」する者もいた(注5)。

このように借金の抵当として不動産的な性格をも具備した「家屋敷」は、家督相続や家屋の継承時に、トラブルを誘発するようになる。

享保二年(一七一七)、下級家臣の中には嫡子を持ちながら、あえて家督を相続させず、他家から養子をとって名跡を継がせる者がいた(注6)。家屋敷を

ども確認しており、近世期こうした居住形態が広くみられたことを示している。

以上のように近世中期以降「家」の継承と居住のあり方が変容し、それに伴って家屋の扱われ方も変質を来していることがわかる。とりわけ、十八世紀にはこの敷地部分をも有効に活用しようとする動きが見え、屋敷内に小屋をたて賃貸させ、不動産収入を得るものが現れた。藩は、当初法令を出し、厳しく規制していたが、時代とともに容認の姿勢に変わっていくのである。それは、副収入を得ずしては、武家の生計がなりたないという内実を知った容認であったと推察する。

5 おわりに

武家の屋敷地は、代々世襲的に維持していったという認識がある。ところが、米沢における武家の屋敷地は、上・中級家臣の約三〇四割において近世前期から後期まで常時移動が起こっていた。その理由として「家屋敷」が超世代的に相続できたことから萌芽した、私有地的屋敷観によって、「家屋敷」の売

買がなされていたことがもつとも大きい。さらに、こうした例は、米沢以外にも金沢や熊本などでも確認できる。これらの藩は、いずれも移封のなかった外様藩である。一方で、移封の多かった譜代藩の場合、転封のたびに家臣に家屋付の屋敷が与えられるのが普通で、場合によっては家財をも含めて藩から支給された。再度の転封の際は、家財を現状復帰し、転出したのである。このため、屋敷地の売買は確認できず、また不動産的な屋敷利用も見いだせない。転封の多かった譜代藩の家臣は、再度の国替の可能性を常に内包していたためであろう。「一生同じ所で住むものではないという観念」が譜代藩の家臣の中に潜んでいたことが推察される。

- (注1) 米沢温故会『上杉家御年譜二十三 上杉家系 外因譜略 御家中諸士略系譜(一)』米沢温故会、一九八六、一四八七頁。米沢温故会『上杉家御年譜二十四 御家中諸士略系譜(二)』米沢温故会、一九八八、一四〇三頁。
- (注2) 「編年文書」上杉文書目録No.一四九〇。この

史料は山形県編『山形県史資料篇十六 近世史料一』山形県、一九七六、四八―四九頁。ここには、かつて勤番を理由に二名の家臣に「屋敷」が下賜されたことが記されている。藩が家臣に下賜した対象は「屋敷」すなわち敷地であり、「家」の支給は多くの場合伴わず家臣自らで建築しなければならなかったものと見える。ただし、「家屋敷之儀ハ家督相続之請継候」とあるように、藩庁側も家屋と敷地部分を一括的に認識し、それらを嫡子継承の対象としていたことが読み取れる。

- (注3) 「井蛙鄙談」山形県編『山形県史資料篇四 新編鶴城叢書(下)』山形県、一九六〇、二九一頁。
- (注4) 「猪苗代町古来屋敷並見聞雜記」吉田家所蔵文書No.四五。市立米沢図書館蔵。
- (注5) 「管見談」林泉文庫目録R一四一―ka。市立米沢図書館蔵。
- (注6) 米沢市史編さん委員会編「御代々御式目(二) 米沢市史編集資料 第十一号」、米沢市、一九

八三、四八―四九頁。磯田道史によれば清末藩においても惣領(嫡子)を養子に出す動きがあったという。また、岡山藩では藩士の三分の一以上が異姓養子相続であったと言う。磯田道史「藩士社会の養子と階層移動」日本研究(日文研)一九、一九九九、二二―三三九頁。谷口澄夫『岡山藩政史の研究』塙書房、一九六四、七七二頁。

- (注7) 長井政太郎「上杉藩の郷土聚落の研究」郷土研究会編『山形郷土研究叢書』国書刊行会、一九八二、一一二〇頁。
- (注8) (注7) 六八―六九頁。



米沢古文書研究会の発展を願って

米沢古文書研究会顧問 上杉虎雄

(1976)

私は、本年満八十歳を迎えた。米沢古文書研究会は、本年創立四十周年という。私の人生の半分は、米沢古文書研究会と関わってきたのかと思うと、まことに感慨深いものがある。

私が古文書研究会と関わるようになったのは、市立図書館主催の古文書解読講座に参加した時からのように思う。講座の講師は、福島大の小林清治先生。まことに懇切丁寧なご指導であり、古文書を解読できる後継者の養成が必要であるなど、柔和な先生の口から熱っぽく語られたことなど強く印象に残っている。

講座がきっかけとなって米沢古文書研究会が出来たが、この会を主宰されたのが、下平才次先生、そして今泉亨吉先生のお二方であったことは当然である。講座がきっかけとなって米沢古文書研究会が出来たが、この会を主宰されたのが、下平才次先生、そして今泉亨吉先生のお二方であったことは当然である。

だ人のあとについていくばかり。これが、「小千谷紀行」であった。ついでに資料が「飯豊の山ぶみ」である。これはわかりやすく、地名もわかり面白く解読が進められ、古文書研究に私なりに、のめり込むことができた一つの原因となった資料である。

当時、私は現職時代である。予習をしないで、毎月の例会に参加するわけにもいかないので、途中ずいぶん欠席を重ねた。不登校生といってもいい時代も長かった。

ある日、下平先生が急逝され、会の存続が危ぶまれた。が、今泉先生に会長となって頂き、長谷部善作先生に会長代行となって頂くことよって面目は立てた。が、今泉先生も体調をくずされており、結局代行の長谷部先生が、会の統率運営に当たられ、講師として学習を存続させてくださった。長谷部先生のご奉仕には、会員一同、全く頭を下げるばかりであった。

今泉先生も、ご病気の復調はならず、ご逝去となった。さて困ったのが後任の会長である。長谷部先生と考えたが、ご本人は置賜史談会の会長を引き

る。講座は二日間あり、初日後の夜、講師を囲んでの懇親会が、幹部の方々によって開かれた。十人前後のこの懇親会に、どういうわけか初心者のお誘いがあり、小林先生やその他の方々と親しくお話しする機会を与えて頂いたことを、今でも有難く思っています。当時、私は南堀端町三五番地に住まいしており、小林先生に名刺を差し上げたら、この図書館と同番地ですね、すぐお近くにおられるのですねと言われたことを思い出します。それやこれやのことに加えて、下平先生、今泉先生に強く誘われて、毎月開催される米沢古文書研究会に参加することとなった。四十年前のことです。資料は写真に撮影された文書で、現物の四分の一程度のサイズである。細かい文書は見えない、読めない、意味がわからないで、た

受けることになったので、古文書研は退会させてほしいと強いご要望があった。正に会は雲散霧消の危機を迎えたのであった。兎に角、理事会を開いて協議し、次期会長を選ぶ他あるまいということでも理事会開催を予定した。その前、数人の理事が集まって次期会長には最も造詣の深い高橋素子氏にお願いしようとして下相談がまとまった。さて理事会が開かれ、まず会長人選に入った。段取りは出来ているので安心して臨んだ会に、突然、次期会長は上杉氏にとの発言。段取りした時とは全くの想定外の発言で当の本人はびっくり仰天。段取り参加者も皆賛成と言う。謀られたと、手を合わせて辞退するもかなわず、運のつきと思いい、不承不承会長職を引き受けたのが、昭和六十二年。以来十六年間、何のなすべきこともなさず、会長職を汚したのみの会長であったことを恥じるばかりであった。

後継の会長は、米沢女子短大名誉教授遠藤綺一郎氏である。先生の学究的なこと、会の運営に特異な新風を吹き込まれたこと等々、ご存知の通りである。私は幸せなことに、本会の十周年、二十周年、三

十周年の記念行事の全部に参加させていただいた。この度の四十周年にも勿論参加させていただく所存である。小林先生、下平先生、今泉先生のご心配になつておられた古文書解読の後継者は無事着々と育ち、次世代をまかせるに足る逸材は数多い。創立五十周年を健康でいて祝福できる私が十年後の米沢に在ることを願いつつ、本会が益々発展し、多くの業績をあげられるよう祈つてやまない次第である。



ありし日の高橋素子さんと（平3.12）

40周年 に寄せる

すべては是れ好縁なり

米沢古文書研究会 元講師 菊池伸之

何やら意味ありげなタイトルとなりましたが、別段怪しいことでも難しいことでもありません。ごく素直に、人は生まれてこのかた、十人十色、百人百色の出会いを毎日繰り返していますが、その出会いのどれもが、皆すばらしい出会いなのだと思つておく思ふのです。

たとえその出会いが、当初は嫌な出会い、つまらない出会い、こわい出会い、もうまっぴらだという出会いだったとしても、のちのちそれらの体験がマイナスからプラスに転ずる原動力となり、遂には百事吉祥の出会いに昇華されていくものだと思います。つまり、「どの出会いもどの出会いも、人間にとつて無駄な出会いは何一つ無い」というのが私の持論ですが、如何なものでしょうか。

さて、今まで数多くの出会いによって、沢山のことを学ばせていただきましたが、中でも「古文書」との出会いはある意味自己改革に繋がる面があったように思います。

特に深く心に刻まれた点を挙げれば、

(1)市立米沢図書館に在職時代、毎年開催していた古文書解読講座に御来講いただいた福島大学教授の小林清治先生と、永年にわたつて市立図書館協議会委員長、古文書整理指導員、古文書研究会会長などおつとめの下平才次先生には、古文書解読のご指導をいただいた上、学問に取組む姿勢を学ばせていただきました。

米沢の豊富な史料を求めて来館する学者、研究者の中には、ご自分の調査、研究を優先するあまり、

とかく自論、我見を振りかざし、態度横柄、口きき傲慢、迷惑千万を旨とする方も居るのですが、小林、下平両先生には露ほどもその気配がなく、学に臨むそのお姿から、厳と謙と優を教えていただきました。(2)上杉鷹山の師、細井平洲先生にも教えていただきました。

それは、鷹山公が疲弊し切った米沢藩風を再興するに当たって、学館建設を志して、平洲先生にその心得を尋ねられたことに対する回答書翰によってでした。懇切にご自分の考えを述べられた長文の一節に、

「聖学の要は、徳を成すにありて、学流にあらず」「学館造営の目的は、知識発明を育てるに非ず、遜讓の徳を成さしむることにあり」

などの文面に遭遇したことにあります。学校というのは、もの知りや利口者を育てることではないぞ、人間形成をめざすことを主眼としなさいよ、と諭していることなのです。

古文書を学んだことよって、平洲先生の直筆書翰を読み得たことから、大きな感銘を受けることが

出来たわけです。

今日、日本では小中学生の学力低下が進んでいるというところで、教育基本法の改正まで話題になっていますが、頭の良い子を育てることを学校教育の要点だとするならば、ますます周りと仲良くなれない子、いのちを大事に出来ない子、自・他殺願望の子が増していくのではないのでしょうか。

いまこそ、平洲先生の説かれる「徳育」重視のあり方を進めてもらいたいものです。

米沢古文書研究会が、本年度四十年目のお誕生となったわけですが、心からお慶びを申し上げます。何百年も前に書き残された古文書によって、字が読める喜びもさることながら、その当時の人々の考えやこころざし、あるいは、目ざした所などを学ぶことは、現代未来の方向づけにも大きく生かされます。研究会いよいよのご隆盛を念じつつ、駄文を以ってお祝いとさせていただきます。

40周年に寄せる

書状を読む楽しむ楽しさ

— 蟹の正体は？ —

米沢古文書研究会 講師 青木昭博

米沢古文書研究会の発足四十周年、まことにおめでとございます。会員皆様方の古文書解読に対する深い意欲と共に、研修旅行も含め楽しみながら学習してきたことが、四十年間も続けられたこととと思います。また、未熟ながら講師を務めさせていただき、ほんの少しはお手伝いになったのか？と、一緒に喜んでいるところです。

名ばかりの講師を始めたのは平成六年の新春「判所改所御令條書」のテキストからですから、知らず知らずのうち十三年目となったことに、いままさらながら驚いているところです（四十年近く続けられた会員の皆様からすれば、「十三年間なんてまだまだ」とお叱りを受けそうですが）。

テキストとして使用した資料も、「判所改所御令

條書」「竹俣文書」「削封日記」「明先日記」「大石家寄贈文書」と積み重なってきました。解読した資料は、米沢藩政を知る上でも貴重な資料で、私の仕事であった『米沢市史』の編纂にも大変役立たせていただきました。感謝しています。

どのテキストも思い出深い資料ですが、現在読んでいる「大石家寄贈文書」や「竹俣文書」の中の個人の書状を解読する楽しみ（苦しみ）を強く感じているこの頃です。個人の書状は、乱雑な筆致や当事者にしか判らない名称など、解読に苦勞することが多々ありますが、その分、解読した時の喜びも大きく、当時の武家の日常生活を知る上でも貴重な資料になっています。そうした難解な書状に挑戦できるのも、研究会の長い歴史の積み重ねと、会員各自の

研鑽による、高レベルの解読力に拠る所が大きいと
思います。

そうした中、今でも気懸かりな書状が一点ありま
す。「竹俣文書」で読んだ竹俣兵庫宛竹俣美作当綱書
状で、その内容は、江戸在勤中の竹俣兵庫に、竹俣
自家薬の「愛洲」を少々送ったこと、吉兆と思わ
れる事も後には大患となる事もあり別紙壱封を送つ
たので直披してほしいことを伝えていきます。そして、
尚々書に「なおなお蟹ハ何にとくらし候や、嘸や心
肝をくたき候半と存候 已上」とあります。

さて、この「蟹」は何を指しているのか？非常に興
味を覚えました。ある人物の綽名では？と竹俣当綱
に関わる人进行い浮かべながら、荏戸善政では？と
想像した所です。そう想うと、善政の肖像画も蟹に
似ていると思ひ込む次第です。研究会では、この書
状だけでは「蟹」が「荏戸善政」とは云えないと反対さ
れましたが、個人的には今でも蟹の字を見ると荏戸
を思い浮かべています。

一通の書状から、様々な事柄が判明する事は古文
書解読の一番の楽しみですが、断定まではいかなく

会員・元会員からの 寄稿

(五十音順)

ても、想像を広げられるのも古文書を読む一つの楽
しみかと思ひます。また、様々な資料を読んでいく
中で、関連する資料に出会い、不明な点が解明され
る喜びは一人です。残念ながら、蟹に関わる資料に
はその後出会っていませんが。

最後に、古文書解読を深く研鑽され楽しんでこら
れた会員皆様の、思い出などが詰まった今回の記念
誌、大変楽しみにしているところです。

蟹ハ何にとくらし候や、嘸や心
肝をくたき候半と存候 已上
竹俣美作当綱書状より



古文書研究会の想い出

井形朝良

今泉亨吉先生が上杉家の家職時代、上杉家の蔵の
中に歴代藩の日記等、多数の貴重な文書があり全部
旧字体の為、読むのが大変だろうが後世に残すため
是非手伝うようにと申されて、お手伝いする事にな
ったのがこの会との拘りでした。当時は今の様な
精度の高いコピー機はなく、大変難儀してコピーし
ました。

読み下しの中になかなか理解出来ない部分がある
と福島大の小林先生のお宅迄お邪魔して教えて頂い
たこともありました。そんなお陰で自分の好きな分
野でもあり、何とか読める様になったのです。

その後、多くの文書に接して古に想いを馳せたり、
知る喜びは何にも替え難く研究会に参加出来た事感
謝しています。後日、文化庁より、以後上杉家文書
を直接コピーすることはまかりならんとの通達があ

り、知らぬこととは申せ大変なことをしたものでした。

當時を振り返る時、感慨無量の想いがよぎります。今後とも会の発展を祈念いたします。

思い出すままに

岩 槻 代 寿

米沢古文書研究会創立四十周年お祝い申し上げます。私は古文書がこんなに奥深く難解なものとは考えず、墨の文字に魅せられ入会させて頂きました。下平才次先生、今泉亨吉先生はじめ会員の方々には学識豊か、今思えばなんと烏澁がましかった事でしょう。その会員の中に高橋素子先生が居られ、よく通るお声で古文書を朗々と読み上げられるのを、私は隣席で聞き惚れていました。下平先生、今泉先生、素子先生そして会員の諸先生方の集う学習会は、いつも明るくユーモラスで、真剣に論じ合える、真摯で温かい微笑ましい雰囲気であった様に思います。

ち、芋鍋、座に座つての勉強会、とても素敵な光景で、この会の素晴らしさを再認識いたしました。又、古文書研究会はじめての一泊旅行は小国の梅花皮荘と決まり、本間とみ先生にお世話になりました。何度も何度も日にちと参加者数が訂正され、漸く実施となったことを思い出します。

昭和五十五年六月三、四日、下平先生のご案内で、飯豊、小国方面の史跡をめぐるながらの旅、九時御廟所―白川ダム―宇津峠（囚人の家）―片洞門―小国―一宮子易神社（産屋）御役屋跡―飯綱神社―県社山―赤芝峽―玉川口（大里峠）―梅花皮荘二時半着。

小休止の後下平先生はお帰りになり、一泊する私達に長谷部先生が前田利家黒印状などを講義して下さい、今泉先生からお話を伺い、梅花皮荘での学習会も終了して、夜は素子先生ご持参の華麗な尾形光琳百人一首かるたを取り合つて和氣藹々楽しい時を過ごしたのです。

翌朝は晴天の大きに雄大な飯豊山が眼前に迫るパノラマに感激、連立つて散策しながら蕨取りに興じ、

その雰囲気に着かれ、解説の難しさは何のその、月一回の会には必ず出席しました。学習会の後は素子先生と三、四人連立つてコーヒーを飲み雑談するもの楽しく、たまたま学習会での文書に江戸時代の封建社会、男性優位社会に女性蔑視の文があつた時など、熱を入れて抗議なさるのを共感しながら、早く読める様になりたいと思つていました。このような年月が過ぎて少々古文書にもなれ、楽しくなつて来た頃花見の宴が白布高湯東屋さんで催され、東屋さんの古文書を見せて頂きました。机一杯に丁寧に広げられた文書を会員の先生方はすらすらとお読みになる傍で、私は和紙の尊さ、古い筆墨に感動していました。

五十年十月には紅葉の一念峯上海上のお宮や、五十四年十月は杉木立ちの静かなたたずまいの笹野観音での芋煮会は出席者全員で芋煮を作りました。笹野観音での会は下平先生の茂吉文化賞受賞のお祝いもかねて行なわれたので、二十二名も出席して賑やか、芋鍋の側に座を敷き、いい匂いの漂う中に、下平先生の武将文書の講義が始まったのです。杉木立大自然を満喫した喜びを胸に、風光明媚で深い伝統文化と歴史ある小国に心を残しつつ帰途についたのでした。

いろいろ思い出は尽きません。今沁々と古文書研究会に入会させて頂き本当に良かったと思います。その時代時代の文字や言葉、庶民の生活などから生きる厳しさ、強い精神力を学びました。古文書研究会が私の心の糧だったような気がします。御指導賜りました米沢・長井古文書研究会の先生方お一人、お一人のお顔が目に浮かんで参ります。心より感謝申し上げます。限りある人生とは思いますが、もう暫くの間お世話になりたく、講師の先生方、会員の皆様宜しくお願い申し上げます。

古研とわたし

植 木 伸 子

昭和四十五年四月、米沢市教育委員会に採用された私は、図書館に勤務することになりました。和田



飯豊山 大日杉前 (昭45.10)

文益館長からの最初の業務命令は、下平才次先生に付いて古文書を勉強すること・下平先生のお手伝いをするのでした。下平先生は同じ町内に住んでいらっしやって米沢市立第三中学校の元校長先生で厳格な方だと聞いておりまして、大変緊張したので、大変緊張し

てお部屋に伺いました。ところが、先生はとてもやさしい方で、ほっとしたのを覚えています。まずはじめに「南亭余韻」をお習いしたのですが、くずし字の読み方を教えられるのに、繰り返し繰り返し、同じ字を辞書で引いてくださるのです。覚えの悪い私はそのたびに心の中ですみませんと聞いていました。毎日一時間ずつ、先生のお仕事を中断して教え

ていただきましたが、だんだん他の仕事が忙しくなり、一年ほどで終ってしまいました。あの期間にもっとしっかり勉強しておけばよかったといまさら悔やんでもせん無きことです。

もうひとつのお手伝いの方は、古文書研究会の雑用をすることで、毎月の解読会について、はがきでのお知らせ、当日の会場準備、お茶の用意などでした。これはずっと続けてくることができました。

古研について考えるといろんなことが走馬灯のように頭の中を駆け巡ります。不勉強なことについては誰にも負けない会員だっと思いましたが、それでは何をやっていったのか。

毎月、例会のごあんないの葉書を書きます。今、私の手元には昭和五十三年からの原稿が残っていますが、最初はガリ版刷りでした。コピー機のできるようになったとき、その便利さにびっくりしました。カットなど遊び心も入れるようになりました。そのうち、ワープロが登場し、これで下手くそな字と卒業と喜びましたが、Kさんにワープロ字は味気ない、いままでどおりでいいと言われまして、今もって毎

月恥を書いています。が、ここ数年は居直って、カットに色づけなどをして楽しんでいきます。

例会当日は会場を準備します。机を並べ、お湯を沸かし、連絡事項を確認しながら一時半を待ちます。例会がはじまり、会員の皆さんの熱心な学習の様子をみるのがとても楽しいです。

お菓子を選ぶのも大切なことです。若いころ？は何にしようかといういろいろ悩みました(予算をオーバーしないようにと)。いまは季節を感じるものを選ぶようにしています。米沢には美味しいお菓子がたくさんあるので選ぶ楽しみも覚えたように思います。

こうしてみると私の生活リズムは毎月第三土曜日を中心に動いているとわかっていいのかもしれない。古研はいつのまにか、常に有るものになっていたのでしょうか。

これからの古研がどのような会として続くのか。時代も変わり、会独自の運営をしなくてはいけなくなっている今、学習仲間を増やすことが重要な課題になっていると思います。四十周年を迎えて、初心に帰ることも大事ではないかと考えるこのごろです。

高橋素子さんのこと

遠藤 綺一郎

高橋素子さんのことを思うと、米沢古文書研究会で「南亭余韻」(鷹山公が一族の子女に与えられた教訓の集)を勉強した時の一場面が浮かぶ。夫は妻の天(絶対的存在)であるから、妻は夫に心から従わねばならぬ、というような所を読んだ時だっと思いが、素子さんが勢いよく発言して、「夫は天だなんて、そんなの厭です。絶対反対です」と勇ましく言われた。頭にはこれが入会早々(昭和四十五年)の事としてインプリントされてしまっているが、「南亭余韻」を読んだのはずっと後だということが、今回編集部で調査でわかった。しかし、まず思い出されるまま、最初に書いておく。

素子さんは頭の回転が早く、思ったことを遠慮なく口に出す。しかし全然悪意やたくらみがなく、むしろすがすがしかった。回りにはいつも、明るい、どことなく華やかな空気が生まれていた。

会の創立十周年の記念に「米沢本 百人一首抄」を復刻して出版することになり、それに添える解説本の原稿の仕上げを仰せつかったのが、高橋、千喜良、遠藤の三人。素子さんのお宅に何度か集まって作業をした。気が揃って仕事が運び、楽しかったが、さらに楽しかったのは、その日の仕事が終わると、この家の女主人素子さんが、ドイツやフランスのいかに高級らしいワインの壺を惜し気もなくあけて、ご馳走してくれたことである。一度などは、ご主人の満雄先生が不意に病院から戻られて、なにやらバツが悪かったが、先生はまるで平気で、にこにここと座に加わり、談話を楽しまれた。

いつのことだったか、赤湯に、行きかえりの宿がオープンして何程か経った頃、そこで会の懇親会をやったことがある。適当に酔って座が和やかにくつろいだ頃、下平会長が、席を立ててきて、素子さんの正面にピタリと坐り、(といっても胡坐だったと思うが)「素子さん」と呼びかけた。「素子さん、あなたは大陽だ」と言ったものだから、さすがの素子さんもキョトンとして「え、わたしが？」と言った

きり、あとが継げない。会長は構わず続けて「あなたは大陽だ。わが会になくはならぬ人だ」云々と力説。けっしてからかっているのではなく、普段、地味な話し方をされる会長が、本気で真面目に言われた。それが分かって、素子さんもまじめに聴いていた。この場面は忘れられない。その時は、太陽とは大げさとも思ったが、この人は居るだけで回りを明るくし、回りの気分を向日的にする。なるほど太陽だと納得した。

ご病気で会を休まれるようになってからは、ご主人のお葬式の時にお会いしただけである。お寂しいことだろうとは思ってはいたが、何か行きにくかった。女の人達はときどき見舞っていた様子だった。

平成十四年六月十九日に亡くなられた。火葬場最後の別れをした時、穏やかなお顔であったが、老いが見えて痛々しかった。お葬式の時飾られた遺影は、もつとお若い時分の洋装で、胸元に大きな白いタイを結んだ、健康な生き生きした写真で、これが我々のイメージに残る素子さんだと思った。

笹野観音境内での芋煮会

大石 英 一

私は昭和四十九年四月、米沢商業高校定時制(夜間)に赴任しました。その年の冬は大変な豪雪で、四月といっても街のあちこちに残雪がうずたかくありました。同じ県内の天童市生まれで、学生時代は



笹野観音での芋煮会 (昭54.10)

横浜市で過ごし、間違っても雪など降らない海辺の茨城県那珂湊市からの転勤でした。予備知識はあったものの、雪と自然に恵まれた米沢だなあとしみじみ実感したものでした。その年から六年間米沢の町と人々に大変お世話になりました。

夜間定時制という工作上、午前中は自分の時間があるので、日中新聞を読んだり、ドライブに出かけたりしていました。ぶらりと上杉公園の博物館(当時社殿の右側にあった)を見学する機会がありました。甲冑類のほかには屏風、器、さらに何百年も経過してなお、墨鮮やかな文書を目の当たりにしました。脇には丁寧な説明書きがありました。少しでも自分で読めたらもっと楽しいだろうなと思っていながら、職員の方でしょうか、「興味あるのですか? 市内に古文書研究会というのがありますよ」と教えてくださいました。その場で私の住所と氏名までメモなさって、連絡してくださいましたので、二、三日後に「会長の下平ですが、公園の南側の市立図書館で土曜日にやっているの、どうぞ来てください」とのお誘いの電話が掛かってきたには大変驚きました。

会長さんが自ら電話をくださったことに嬉しさも手伝ってか、「はい、ありがとうございます」と、思わず返事をしてしまったような覚えがあります。小雨の降る昭和五十年の秋、風格のある市立図書館の

玄関から初めておそるおそる例会に参加したことを今でもはっきり覚えています。あの時、皆はなぜこんな文書をすらすら読めるのか不思議でなりません。もう、逃げたいような心境でした。それもそのはず、輪読制となっており、テーブルに座っている順に、解読していくことになっていました。最初はパスさせていただき、一年ぐらい経ってから漸くしどろもどろにも、読めるようになって時の嬉しさは今でも鮮明に記憶しております。自分の番の近くになつてくると、胸がドキドキして来て、「この辺から自分の番かな」などと落ち着かなくなるのが常でした。そのあとに、下平先生、今泉先生、遠藤先生方がきちんと補足指導をしてくださるのでたいへん有難かったです。心配は取り越し苦労でありました。皆さん本当に優しく、解読のいろはから手ほどきをしてくださいました。『米沢本 百人一首抄』を毎回七、八枚ずつ、植木さんがコピーしてくださったものを学習するのです。学校の活字体の古典教科書とは違い、変化のある墨の書体と変体仮名交じりの文章は実に味わいがあり、感動の連続でした。

いただいた事に、心から感謝申し上げます。来春定年退職ですので、再び古文書の世界に浸りたいなあと思っているところです。貴会の益々のご発展をご祈念申し上げます。

古文書との出会い

小野 榮

昭和三十年代のころ、市中央公民館に勤めていた。いまの上杉記念館である。隣接して市立米沢図書館があり、両館の間に百人ほどが入れる図書館ホールがあった。

確かな年月は忘れたが、或る年、ホールで古文書の解読講座が行なわれた。公民館は夜の事業が多く、昼間勤務は暇であったから、暇つぶしにのぞいて見た。参会者のほとんどは先生と覚しき中高年の人達ばかり。渡されたテキストは、墨黒々と初めて目にする「くずし字」。講師の先生が何やら話をして、テキストを読む。全く解読できない。分かったのは「五

旅日記風の文書から上杉家文書など硬軟取り混ぜた変化のある資料を選んでいただいたことも当時の生活ぶりを知る上で最高の機会となりました。活字体からの情報とは一味も二味も違う感動を得ることができました。

またいつだったか、笹野観音境内での辛煮会も忘れたい思い出です。どういうわけか笹野観音になつたのです。これも古文書研究会ならでの出来事で、雰囲気や大事にする皆さんの心意気があつたからこそでしょう。酒がまわつて、ほろ酔い機嫌になると下平先生の十八番「霜台公」が飛び出し、今泉先生の明るい歌声も弾んでくるのでした。「霜台公」とは上杉謙信公の愛称とのことらしいが、最近インターネット上で、新潟県立柏崎高校と高田高校の校歌に歌われている事がわかりました。

仕事で、東京出張の際、時間があればいつの間にか神田の古書店街に足を運ぶようになり、手ごろな文書を見つけてくるなど、自分の興味関心が何となく変わってきました。昭和五十五年に山形に転勤するまで約五年間落ちこぼれながらも楽しませていた

がローマ字の「Z」に似てるな、ということだけ。

こんな勉強をして一体何になるんだろう、今後何かの役に立つとは到底見えない。時間の無駄とばかり、早々に退席してしまつた。その古文書と、十数年後に嫌でも付き合わねばならぬことになるとは、夢にも思わぬことであつた。

昭和五十四年、市制施行九十周年記念事業の一つとして、米沢市史編さん委員会が発足。事もあらうに私とその事務局主幹に命じられた。編さん委員会は下平才次先生をはじめとして、上村良作、今泉亨吉、松野良寅、山田武雄等々その道のベテランが十三名。事務局員は小野と清水澄ほか事務の女性一名。専門員、嘱託として渡部恵吉、高橋勝郎の両氏。事務局は図書館二階の古文書研究室に同居することになつた。研究室といつても、下平先生がただ一人居られるだけで、そこへ五人も入り込んだのだから、先生にとつては大いに迷惑だつたに違いない。

さて、市史編さんの為には「資料集」を出来るだけ多く発行しなければならぬ。そこで編集資料第一号として選んだのが、図書館に原本のある「寛政

五年（一七九三）分限帳」。同年の米沢藩士五千余名の氏名と身分と供与される石高を列記したものである。

金田 祐作

これを四人で読む。たかが氏名といっても、くずし字で書いてあるから、私のようなズブの素人には読めるものではない。十人の氏名を書くのに、何度下平先生の机に走ったか分からない。

それでも半年ほど経つと、何とか氏名だけは読めるようになった。私の古文書習得は、寛政五年の米沢藩士達との交際から始まったのである。

武家文書と町方文書の書体の違いにも驚かされた。武士の書く文字は格式に従っているから馴れると読めるが、町方や村方の文書は自己流の上に、乱筆、誤字が多く、読み解くのに一苦勞した。古文書を学んでから、すでに二十年以上経つというのに、町方や村方文書には今でも泣かされている。

怠け者の「あこがれ」

米沢古文書研究会発会四十周年ご同慶の至りに存じます。

四十年もの永い間営々と維持発展に尽力された、役員、先輩会員の皆様に改めて敬意と謝意を表します。

私が入会したのは平成九年四月でした。当時の名簿が出てきましたので正確です。

わたしは子供のころから実家の土蔵にごちゃごちゃあった古い書き物や草紙類をパラパラめくったりするのが好きでした。更に大人になって温泉旅館や料亭などの床の間に懸けてある書軸をいつかはスラスラと読めるようになりたいというのが「あこがれ」でした。我ながら至極単純素朴です。

四十年前の私の勤務先は当然、全国的に完全週休二日制などは施行されていませんし、そんな社会風潮は全く考えられませんので、土曜日の午後一時か

らの古文書研究会は残念ながら生涯縁のない会と諦めていました。何十年先の定年後からならなんとかなるのではと漠然と考えていました。

それから三十年後、ウサギ小屋の働き蜂の日本の労働事情に対し、WLOの強い勧告を受けた日本政府はついに週休二日制の方向に踏み切りました。しかし実態はそんなに簡単にはゆきませんでした。私は月に一度の講座出席は可能と思い、勇んで入会しました。もう私も六十の手習いどころか六十五歳でした。

最初に出てみて仰天しました。斎藤先生の講義はまず前の席から順番にテキストを生徒に読ませてそのあとに正しい読みと解説をされるといいうりかたです。どの列の一番目が誰か、その列の何番目に私の部分が当たるのかその日で違います。要するにテキストを全部予習しないと当てられても答えられません。最初の日、私は本当に一字も読めませんでした。読んだのは隣席や傍の人たちに全て助けて貰ってノルマが終わりました。

その後もほぼ同様です。不登校が大半、予習はし

ないですから、進歩するはずがありません。いまでも入会当時と同じレベルです。わずかに「百枝折」という不識庵から鷹山公までのアンソロジーや、飯田忠林の「たびのすさび」の駿河旅行記などが印象に残っています。

しかし如上の文も怠け者の弁解です。

それでも若い頃からの「あこがれ」はそのままです。今後ともよろしく願います。

（平成十八年十一月二十一日に逝去されました。

ご冥福をお祈りいたします。）

古き良き日々

杉浦日向子こぼれ話

川口 雅子

大正末期当時の米沢に電気の専門店など殆んど無かった頃、一人の進取の気性の男性が栃木県から当市の後進性に目をつけ、旧屋代町（今の辻自動車庫庫兼運転手の休憩所）に当時としては珍しい洋風

の店舗、住宅、電気工事の為の工場を建て、「藤電気商会」通称「藤電」を開業、これが当時の当主の先代で、ちょうどその向かいが私の生家です。

藤電は七人姉妹、私は八人兄妹。私とは六女の節ちゃんが同い年、二歳上の五女の道ちゃんとは私の姉が同い年、二歳下の七女の博ちゃんと私の弟が同い年といったわけで、どっちが自分の家かわからない程入りびたり、仲良くしたりけんかしたりの竹馬の友です。

藤電は商売柄、今流行のオール電化のはしり、今から六十年前頃蛇口をひねるとジャーツと水が出るし、台所は殆んど電化、居間には大きな腰かけてくつろげるこたつがあり、二階には応接間があり、大きなオルガンやふかふかのソファアがあつたりと、古色そうぜんな我家とは月とスッポン、家の造作も近代的で合理的で総て不都合な事は即改善する気質は米沢人氣質と異なり、子供ながらいつも驚きうらやましく思っていました。寒い時には電気ストーブが赤々とともり、こたつには電熱器に金網をかけ、ぬくぬくし、ペチャペチャわいわい、お姉様達から

生糸商の鈴木家の一人息子が彼女と半ば強引に結婚し、生まれたのが杉浦日向子です。

蛙の子は蛙、日向子も「路上観察会」で博物学者の荒俣宏と知り合い半ば強引に結婚。間もなく離婚。

「美女と野獣の結婚」等々週刊誌を賑わしたり。もともと胃弱な彼女は一時別人のようにやせ、ようやく元に戻ったかなと思う間もなく、白血病に冒され、それを内緒にしてテレビ出演をし、数年間NHKにも辞意を申し出たものの受け入れられず、結局癌で他界しました。

酒、そば、クルーズ、米沢が大好き。特に小野川温泉の寿宝園三階の角の部屋が気に入りで何度か泊っていたようです。

十数年前、博報堂主催の日本デザインフォーラム(代表 黒川紀章)が山形と米沢で開催され、二、三十名のいわゆる各界の文化人が講師として参加した時も、彼女は積極的に参加し、大いに気を吐いたと聞きましました。

いつか彼女の伯母、母、叔母七人の卒業した母校で講演してもらってそれを聞きたいものと思っ

は男性論、恋愛論、映画、音楽その他もろもろの指南を受けたりと、それはそれは楽しい時を過ごしました。とにかく、陽気でユーモアがあり、意志強固、それぞれ個性的、行動は積極的。皆色白で目はパッチリ。世の年頃の男性が黙っている筈はなく、「今日も高工のAさん、Bさん(現・山工大学の学生)が、たま(電球)買いにきて、ラブレターそつと書いていったさ。昨日も今日も明日もか。おらやんだ、あがな人、Cさんだったら別だけど」の類の話はいつつも聞かされ、夢を見ているような出来事が色々あり、平々凡々なんの変哲もない私にとっては、何もかも目新しく刺激を受けました。

昭和二十七年、節ちゃんが高校を卒業。同時に上京、就職。これがきっかけとなり家族全員が次々上京。皆風のように去つていき、一時は米沢一の現金持ちといわれた「藤電」もいつかなくなってしまう。紛れもなく戦争に翻ろうされながら…。

五女の道ちゃんは米高女最後の卒業生。中條病院に就職。シャイな彼女は通勤時表通りを避け、細道の裏通りを通っていたのが運のつき、幸町の煙草と

たのに、うたかたの夢と消え果てたこと、残念です。

古文書とわたし

木村 喜雄

嘱託として図書館にお世話になって、最初の私の仕事は上杉文書「歴代古案」から直江状と呼ばれる直江兼統の豊光寺承兌に宛てた書状を探すことでした。家康の会津出兵の直接の原因になったといわれるこの書状、内容のあらましは知っていても、ナマの書状を見るのは初めてでした。

興奮状態で「兼統、承兌」「兼統、承兌」と口ずさみながらページをめくっていきましました。なかなかこの書状が出てきません。後でわかったことですが、「歴代古案」には全部で千五百七十点の貴重な史料が収められている。たしか最後の五冊目、しかも終末近くにやっと探しあてることができました。ほっと一息ついた、あの瞬間を忘れることができません。

今朝之尊書 昨十三日下着、其拝見 多幸二候

で始まるこの書状、私にとって初めての古文書との出会いといってもいいものでした。

学生時代、「所かわれば品かわる」の言葉と、「巡見」の魅力にひかれ地理研に入った私です。卒論の前に、村方文書を読む必要から、急ぎ、岩波書店刊の『近世地方史研究入門』等、史料の写真とその読みが記してある参考書を買って求め、一字一字、虫めがねで読み筆写するひとり学びをはじめました。卒論も何点か苦勞しながら読み、どうにか仕上げました。

教職に入ると古文書とは全く無関係の生活となりました。相手は小学校の児童です。私の好きな歴史関係の本は本棚に並んでも、校内研究のたびに求めた、国語や算数の参考書類に押しやられ、古文書解読のためにと求めた本はいつしかダンボールの箱入りとなっていったのです。

探しあてたこの直江状、コピーをいただく和家人に帰って学生時代に戻り、一字一字筆写しました。読めない空白部分を確かめるために「上杉家御年譜三」とつけ合わせ、確認したら誤読もありました。「情

は、ツアー旅行では見られない研修地、しかも私がいつか訪れたいと願う場所だけに大変勉強になりました。また、楽しい思い出も沢山いただきました。本当にありがたくなります。

古文書は習うより慣れよとか、いただいたテキスト、遅ればせながら、読み続けていこうと考える昨今です。

会への参加の愉しみ

近野 均

「この文章の読み方を教えていただけますでしょうか」と図書館に尋ねたら、「古文書研究会というところがあり、のぞいてみてはどうでしょうか」と答えが返ってきた。これが古文書研究会との出会いです。応待していただいたのが当会事務局の植木さんでした。当時開沼先生の古典講座があり、その中の資料の内容を知りたくて図書館に問い合わせたのがキッカケです。その直後からお世話になり今日に

けない。スラスラ読めたらなあ」と、しみじみ思いました。その後、慶長五年卯月朔日付、上洛をうながす承兌の兼統宛の書状も読みました。これらの古文書は歴史を写し、研究者の著論の下敷となっていることを教えられました。

こんなことがあつて、六十の手習いを始めようと、「古文書研究会」に入れてもらいました。しかし、テキストは手にも、私事を含め諸々の雑務が時間を奪い、折角の例会の案内をいただいても欠席続きで、研修旅行の要員になり果て、只ただ心苦しく思います。

研修旅行で



吉良温泉 (H11.7)

至っています。四十年近く民間企業に勤め技術職に携わってきており、関心は科学技術が中心でした。そういう訳でもともと古文書に興味がなく、のぞいたものの、先生方や専門の方ばかりで、この場にいるのが妙と申しますか、今でもそんな風を感じております。

入会三年目の今、まだ読めない、理解できないことなのかも知れませんが、古文書にたいし興味が増したかと尋ねられると、答えはいいえ。しかし勤務上の都合のつくときはできるだけ参加をしています。このことになぜお前は参加していると自問自答すると、次のような答えとしてあげることができるかもしれせん。

・大先輩方が若者、女学生のように輝いていることに惹かれる。

・意欲的に取り組まれている岩槻さん、私よりちょっと会で先輩のなみさんは、私より年上だが古文書に挑戦されているのは女学生そのもの。・すてきな言葉や忘れかけていた習慣のことが聞ける。

上杉先生の縁側でススキと団子を供えてのお月見のお話など。

・珠玉の言葉をいただける。

・昨年、総会の懇親会での倉雄先生のお言葉など。

「字は一年に一つ覚えればよいよ」

・先輩の中にと無性に安心する。

企業でいつも叩かれていたため会ではほっとする？

そのほかにもいろいろ魅力的なことが沢山あります。総じて、会に参加している理由はこの雰囲気です。いつまでも浸っていたい、というのが正直な気持ちです。古文書の解説の方はご勘弁いただきましたのですが、倉雄先生のお言葉に従い、時間をかけてじっくり取り組むということでお許しをいただきたいと思えます。

今後とも人生の先輩として、いろんなことをお教え下さい。よろしくお願い致します。

古文書と私

齋藤佳子

退職後の余暇をどう過ごすかという大きなテーマに向かうことを、私は意識的に遠ざけてきたように思う。それは、実際問題として趣味を持っていなかったからだ。そして、体力や気力の衰えを自覚するにいたって、打ち込めるものを何も持たない現実に直面し、立ち往生していたのであった。

自分では何も出来ない分、見たり聞いたりするのは好きだ。新幹線を利用すれば、東京も日帰りできる。ジバングの恩恵に浴して、二ヶ月に一回程上京して美術館巡りをする。

洋の東西を問わない。自分の足で、作者が生まれ育ち活躍した所を訪ねることは出来ないから、こちらに渡ってきた名品を見たくなるのだ。一級の芸術品の前に立った時の感動は、いいなあという言葉でしか表現できない。

ところで、日本の寺宝や古美術展ではいいなあ

思う一方、画賛や文書類が読めないために、心底から鑑賞しきれない不満を抱えて美術館を後にすることが多かった。三蹟とか三筆と言われる人の墨痕を、

いい線だ、筆の流れがきれいだ、若い時の筆力はやっぱり勢いがある、うまいなあと心を打たれながら、ちゃんと読めたらどんなにいいだろうと、何度悔しい思いをしたことか数え切れない。

昨秋、たまたま元同僚と話す機会があった。その時、私は趣味を持たない愚かな生き方を託った。それに対して「古文書研究会に参加してみたら」とアドバイスしていただいた。

「古文書」、言葉としては知っていたが、実際はどういうものだろうと関心をそそられ、早速十一月の例会に参加してみた。

テキストを見てびっくりした。どれが漢字で、どれが平仮名か全く分からない。先輩諸氏は、「慣れるしかない」とおっしゃる。それにしても、くずし字から楷書を想像するのは至難の業だ。せっかくの「漢字くずし方辞典」も「くずし字解説辞典」も役に立たず、虎の巻を片手にしなければとても読めない。

脈絡のない出たら目な読みをして「……候」とごまかす。山王堂先生の読みと解説を拝聴して「そうかなるほど。」と初めて納得する有様だ。

読んでいるうちに、どうしてこういうくずし字になるのかと、摩訶不思議になる。一字が十数通りもあるくずし方を、先人は頭の中に入れておいて必要に応じて使い分けていたのだ。その記憶力には脱帽するしかない。内容も当時の世相を描いていて、特に重税に苦しむ農民の姿に「苛政は虎よりも猛し」、いつの世も庶民は辛く苦しい目に遇っているのだとひとり腹を立ててしまう。

六月初め、出光美術館で絵巻や書跡を見た。読める字があるだろうかとドキドキしながら見ていたら、ぼつんぼつんと読めて嬉しかった。「よし、古文書頑張るぞ」とファイトが湧いてきた。

研究会の和やかな雰囲気支えられて、老後の楽しみをやっと見つけたように思う。

地味に続けて、読めるようになりたい。

会員の皆様、ご指導のほどどうぞよろしく願っています。

雑感

佐藤 美保子

父の書棚を整理していると、『米沢文化』という小冊子を見付けて、何気なくパラパラとページをめくっているうちに、「仍如件 高橋素子」という標題に目が留まった。驚いて、小さな活字を追ってみると、なんとそれは米沢古文書研究会に關わるお話。会の発足当時の経緯や、楽しい思い出話、素子先生獨特の文体で書かれていました。

読みながら懐かしくて、近くに先生のお声が聞こえてきそうでした。先生の古文書に触れる切っ掛けは、軽い気持ちで小林清治先生の解読講座に申し込んだことだったそうです。思えば私も同じでした。小林先生の講座で初めて手にした「古文書」。全く読めずに四苦八苦している私に、後の席におられた方（小山栄氏）が見かねて、「来年の春に古文書の初級講座がはじまるはずだから、それに出るといいよ」と教えてくれたのです。

しております。

ところで、耳順の年を迎えると、何となく人恋しくなるものなのでしょうか。クラス会には多くの旧友が集うようになって、東京での会の折、「次回は米沢でやらないか」と、お酒の勢いで誰かが言い出したのです。これは困ったなと一瞬たじろいだのですが、人数も四十人余りのクラスの事、一人でも何か成るかなと思いついて引き受けました。少しでも米沢に好印象をと思い秋に計画。勿論宴会だけではつまりませんから、翌日には博物館へ行き、上杉館長にご案内頂いて米沢の歴史のピーアールを怠りませんでした。「古文書からいろいろ歴史が見えて来るものよ」と、理系の友へ無理にも古文書、古文書とこれ宣伝に努めました。後の礼状の中には、「暇が出来たら（まだ現役中）僕もゆっくりと文化に触れてみたい」という友が現れて、これは大成功と一人にんまり。つれづれなるまゝに……。

そんな訳で、幸運にも私は初級講座の第一期生にされたのです。初めの一年間は、それはそれは大変でした。それでも素子先生と諸先輩方に支えに支えられて、いつの間にかやらずに上級講座の末席へ。そんな折、鈴木倉雄先生に、「長井の方にも来てみたらどうだ。長井では米沢と違って地方じかた文書を勉強しているぞ。いろんな文書を見るのも勉強になるぞ」とお誘いを受けたのです。何度目かには、勉強せねばならぬ、という気分になってしまい、以後何年間か長井古文書研究会にお世話になりました。芳賀勝助先生の一字一字丁寧な解説を頂いて、あ、そうかとずい分納得。そんなこんなの中にNHK古文書講座まで受講するようになっていました。その間当然の如く、小林先生の講座には欠かさず出席して、去年よりも今年と、一つでも多く読めるようになっていると、本当に嬉しかったものです。

光陰矢の如し。疾いもので古文書に係わって、およそ四半世紀。文学にも歴史にも疎かった私が発見までこれたのは、古文書仲間の多くの方の有形無形の支えがあつてこそです。本当に有難いことと感謝

入会十年に想う

佐藤 與 七

当研究会にお世話になって十年目になる。お陰様で月一回の学習会が待ち遠しくなった。又、鷹山大学の解読講座も第四十一回から始め、受講は一回も休まなかった。最初の頃、小林先生の伊達文書は大変難しいと思ったが、慣れるにつれて面白くなり、仙台市史の資料編まで求めて解読し添削して一人楽しんでんだ。月例学習会には沢山の武将文書に大石文書と先生方の丁寧なご教授に感謝しながら内容の理解に努めている。

平成十四年頃だったか、植木さんから図書館資料の解読依頼があり、私の分は徳川慶喜の上奏文であった。誤読も大分あったと思うが内容に興味を覚え、大分難解だった『徳川慶喜公伝』や司馬遼太郎の『最後の将軍』などを読んで、以前から漠然とした教科書的な知識しか持ち合わせなかった「明治維新」をもう一度勉強したいという気になった。

古文書の読解には歴史の背景の理解が欠かせないが、所謂「明治維新」については余りにも複雑難解で食わず嫌いに近かったものが、前記著書の他『竜馬が行く』を始めとして『翔ぶが如く』に至るあの膨大な一連の小説群の厄介になったお陰で微かに見えてきた時の嬉しさは一入であった。長井の研究会でも「竜馬の手紙」の一部を学習し、維新前後の浪士たちの活躍を理解することが出来たが、ただ単に小説を読み流すだけでなく、活きた資料に接してその場に居合わせたような気分になる、その醍醐味といったものは古文書学習をする者の特権であると思う。

私の故郷白鷹町にも、明治の初めから大正の初年までの文書が残っていると聞いて興味を覚え解読してみようと思った。

一つは明治五年の名主制度に替わる大区・小区制度下における戸長船山清四郎の『戸長日誌』(明治六・七年分がB4版野紙七五〇枚)、もう一つは明治四十二年から大正四年までの七年間、筆者の出生地である鮎貝村の村長を勤めた坂乾一郎が残した『日誌』

古文書との関わり

山王堂 初 雄

機動部隊司令長官、南雲忠一提督の真珠湾攻撃が、国民学校入学の年であり、ポツダム宣言受諾による無条件降伏が、同五年生の夏であった。

六年終了すると学制が変わり、全員新制中学に入学したが、校舎は小学校の一部を借りての授業であった。図書室も遅れて新設されたが、二階の廊下の突き当たりであり、予算も少なく、一部の先生や村の有力者からの現物寄附で賄われた。冊数も少なく、勿論校外貸し出しなどはなかった。

私の家にフトン部屋というのか小部屋があったが、その片側半分位に江戸末期から明治初期にかけての写本、同時代の版本、活字本があった。写本、草紙類は最初より敬遠したが、活字本は神田伯山、三遊亭円朝などの講談本が大半であったが、それらの本を長持の上に寝そべり、ノミの這い上がってくるのも苦にせず、むさぼるように繰り返し読んだ。漢字

六冊(四三年分欠)である。何れも毛筆の細字であり、不明の語句も大分あったが、大変興味深いものであった。太政官政府による未曾有の政治改革の下、朝令暮改の告知に戸惑った地方の行政吏員の様子が、郷土に残る文書の解読によって、手に取るように見えてきて面白かった。

振り返ってみるに、私の第二の人生における生甲斐は、いつの間にか古文書ということになってしまった。残された貴重な老後の時間をこのように楽しく生きることが出来る悦び、それも長井の研究会前会長芳賀先生と、今はなき、大先輩鈴木倉雄先生から研究会への入会を唆されてご指導を受けることが出来たお陰であり、いくらお礼を言っても足りないことだと感謝している。倉雄先生は最晩年まで学習会の前には、あの高齡にも拘わらず、必ず予習の上、ノートに筆写して臨まれた。あの学習態度を私は終生肝に銘じておきたい。

には「カナ」が振ってあり、ひらがなには変体かなも混じっていたが、文脈から自然と読めるようになり、読書の魅力にとりつかれた。

それより数十年の年月を経、退職後を考えるようになった頃、NHK通信講座の中に「古文書を読む」の科目のあるのを知った。折角先祖が書き残してくれた文書を読めるようになったらの思いで、その基礎講座を受講することにした。講座は当然のことながら読み方だけでなく、全体的な解説、語句の説明もあり、毎月の添削レポートもそれなりの成績であった。

翌年(平成三年)退職し、「応用編」に進んだが、その年の六月、米沢図書館主催の古文書入門講座があり、高橋豊先生より『土佐日記』等を教わった。

更に同年十一月には南原公民館主催の古文書解説講座が、林泉寺住職菊池伸之講師で三夜続いて行なわれた。直江兼統が病い勝ちな長男平八に宛てた、父親が子を思う心情のこもった筆太の雄渾、奔放な筆致の文書は、NHK講座を一年受講した程度では歯が立たなかった。

菊池先生に「米沢古文書研究会というのがあり、月二回例会を開いているので興味があるなら入会したら」と勧められ、一大決心をし、十二月図書館に行き、丁度貸出係をしていた植木さんに入会の申し込みをし、資料を頂いた。

平成四年正月、おぼろしく初めての例会参加。一部は上杉武将文書（菊池伸之講師）、組外公務雑記（遠藤綺一郎）、二部は枕草子、悪狐三国伝（高橋素子講師）であった。上杉武将文書では判読に苦しみ、枕草子は古文に悩まされた。総じて一部には厳しさがああり、二部は半数近くが女性会員で和やかさがあつた。それぞれ初心の私を温かく迎え入れていただいたのが、今迄続けてこられた要因だと感謝している。

特に上松時雄、相沢茂雄両先輩には年令が一回り以上離れているのに、公私共お世話になった。何回かの上杉博物館からの解説依頼文書を三人で勉強し合い、教えを受けたのが懐かしい。温厚篤実と直情径行の二人から古文書以上のものを学んだ。両先輩とも健康を害され、本意ならずも退会されたが、一

日も早いご回復を願うこと切である。

親子二代、お世話になって

下平 忠正

下平では才次・忠正の二代にわたり古文書研究会の仲間に入れていただきご指導を受けて、有り難いことだと感謝しております。

特に、才次は昭和五十四年十一月三日、研究会の後援により「茂吉文化賞」の荣誉に輝きました。内容は「永年にわたり、古文書の解説を通じて歴史的文献の体系的整備にあたり、郷土文化の向上に寄与した」ことであります。

昭和五十七年四月二十一日の逝去にあたり葬儀の席上で「米沢市功績賞」を拝受いたしました。その中で「地域史の重要性を認識し、歴史的文献の体系的整備と解説指導に心血を注いだ」と評価されました。

忠正は古文書の解説は歴史資料の新しい価値発見

だとして研究会の一員に入れてもらいました。平成十三年十一月三日、「米沢市功労賞」を頂き、その内容は一部に米沢市史編さんに関与したとあり、背景には古文書研究会の姿が大きく浮き上がってくるものであります。

しかし、現在はパーキンソン病症候群の診断を下され、休養のやむなきにいたり、残念の極みです。再起の時まで温かく見守ってくださることをお願いするばかりです。

初級講座に参加して

鈴木 清子

初級講座に私が入会したのは、昭和五十七年の初夏の頃と記憶しています。

受講生の中に、二、三人の知人はいらっしやいました。他は初めてお会いする方ばかりでした。

講義は、先生の「今日は何ページからですね。それでは、右側の前の方から順に読み継いでくださ

い」とのご指示で、一ページぐらいずつ読み継ぐ進め方でした。私は幼稚園児のようにたどたどしく、しかも、大変時間がかかりましたので、この次からは、もう少しまともに読めるようにと、予習をしていったことが思い出されます。

読み方で、群を抜いてお上手だったのは、岩槻代寿さんでした。句読点のない古文書を滔々とお読みになられたのを、よく憶えています。

高橋素子先生は、「はなやか」という言葉がびつたりの方で、洋服、バック、靴と、ピンク系統のものでうまくとめられ、教壇に立たれると、大輪の花が咲いたように、教室が明るくなりました。

また、研究熱心な受講生の中には、先生のご説明のあと、必ず付け足しをされる方もいらっしやいました。

私は、今も細々と書続けておりますが、特に、かなを書くうえで、古文書に馴染んだことが、底力になっていると自覚しております。

お習いした古文書の数が、十七冊もあります。続けたかったのですが、家の事情で辞めなければなり

ませんでした。残念でなりません、一時期なりと講座に参加したことで、心豊かに生きていることができたと思っております。

先生方、受講生の皆様、ご指導、ご交誼ほんとうにありがとうございました。

古文書と私

角 屋 由美子

役者が舞台で、学者が本に埋もれて死ねれば本望とはよく聞きますが、私も古文書と共にありたいと思っておりますし、事実自身の私に古文書と結婚したのかとおっしゃる方もおられました。そんな若い日々を思い出しながら綴りたいと思います。

東京の大学で歴史学を学び、米沢に戻った私は博物館に求人状況を尋ねました。女性には甲冑など重いものは持てないし、刀には触れないから使い物にならないと一蹴されました。現代なら問題発言なのでしょうが、米沢はまだそんな時代だったのでしょう。

です。それが、突然私の目の前に現れ、その後の調査、修復、国宝指定へと学芸員冥利に尽きる仕事をすることができました。古文書研究会で培われた解読力のおかげと感謝しつつ、さらにさまざまな角度から新たな古文書研究の課題に取り組むことになりました。

上杉家文書の核である中世文書は、すでに複数の機関で解読、刊行され研究の発展も見られますが、近世文書は全容が知られていません。解読を試み、古文書研究会にもご尽力をいただきましたが、公開までの整備にはまだまだ時間がかかることでしょう。平成十三年に伝国の杜がオープンし、博物館も立派になりました。しかし、準備の段階から忙しくなり土曜日の出勤もあることから研究会に出ることがなくなりしました。また、博物館でもじっくり古文書を読む時間が作れないのです。再び落ち始めた解読力と近くにありながら意識的に遠くなってしまう古文書に、悩み深く環境の回復に苦悩しています。現在は甲冑を飾り刀剣の手入れも行なっていますが、やはり古文書と共にある人生を全うしたいと願って

大学時代に少し読んでいた古文書もだんだん読めなくなり、不安と焦りで苦しくなっていました。そんな時、米沢古文書研究会の存在を知り、早速入会いたしました。一番か二番目に若い会員だったと思います。大先輩たちはとても熱心で予習も完璧でしたから、私も大分鍛えられました。その頃、門前払いとなった博物館でしたが、米沢市教育委員会の嘱託で博物館学芸員の仕事を始めていました。しかし、嘱託職員ですから生計を立てるには至らず、東京から恩師や知人の誘いもあつて悩みの時代でした。

その時は一生懸命で何かしらの決断をするのですが、人生を振り返ると岐路であつたと思い知らされるいくつかの出来事の一つが、私の場合やはり古文書でした。平成元年、重要文化財の上杉家文書が米沢市に寄贈されることになったからです。この文書は、重要文化財に指定される際、大学の恩師が関わっており、私が米沢出身であることを告げると、「君のところにはすごいものがあるね」と言われたのでした。しかし、大学生の私には上杉家の御蔵の奥深くに存在する古文書は全く別世界のものだったので

います。

古文書のめり込みの始め

高 橋 昭 夫

或る日長井図書館に行った。館長さん名で「古文書基本の講習を行なう。初心者の方は申し出てください」との公告が張り出された。今にして思えば、若気の至り、直ぐに申し込みをした。

講習会の当日は七、八名か五、六名が出席、すぐ講習が始まった。

板書されたのは、

あ い う え お
か き く け こ
さ し す せ そ

以上の「ひらがな」の元の漢字を書けとの事。小生の頭は混乱した。何せ学校で習ったのは、インピーダンス・Zの交流理論の電気用語しかない。

出席者の数名の方は流石に書いて居られる様子、

小生はボカンと黒板を眺めるのみ。

「高橋君、わかるか、何か書いてみる」

「全然わかりません」

館長さんのお話に移る。日本民族は自ら自分の字を作り上げた。それが「ひらがな」で、もう一つは「カタカナ」であることを話された。そして別紙に元の漢字を書いて下され配布された。

そういえば、父が「一茶」の俳句を解説していることを思い出し、小生も勉強したので教えてもらいたいと言うと、「よかろう」と言っ一つ一つの文字「む」はなんと読むかと言われ、父の手にしている一冊の俳書を見せられた。これが「花」のくずし字だ、と言う。万事休す。別世界の様な文字ばかり。昭和生まれの子供はこんな摩訶不思議な字ではなく、活字の本しか知らないのが普通だ。

以後、長井古文書研究会や会長の芳賀先生の夜間講習会に入会させて頂き、のめり込んだ。

の産屋、川西にある伊達家ゆかりのお墓等々史跡、遺跡に連れて行って頂くのが、とても楽しみでした。そんな折クリスマスのお食事の時、今度は、一泊もいわねえと言う話になり、高橋素子先生の貴方やりなさいよの一言で決まり、汽車にも、船にも乗りたいと言う事で、誰も行った事がない、粟島に決めた宿泊だけに予約を入れ、米坂線に乗りワイワイガヤガヤ楽しい旅の始まりです。岩船駅に降り立ち、船に乗るには、どうしたら？ 十数名で駅の前に腰を降ろして居るとタクシードライバーが準備してくれた車で、無事粟島汽船に乗る事が出来ました。天気が良く甲板で海を眺める事90分期待の粟島に着きました。旅館のバスが迎えに来てたのを見て、ほっと胸を撫でおろしたものでした。翌日の朝食事案内された所は、海辺で、みんなで焚火を囲み魚の焼けるのを待っていると、目の前の曲げワッパに焼いた魚と生味噌を入れ水を注ぎます？みんなが「えっ」と思っていると、真っ赤に焼けた石を入れた瞬間ジュツと音がし一瞬で沸騰、期せずして一斉に歓声が上がり拍手が鳴りました。嬉しかったです。そん

古文書研究会40周年によせて

高橋 和子

古文書研究会との出会いは、25、26年前に遡ります。その頃のテキストは武將文書が中心で、今は亡き下平先生と今泉先生が交代で懇切丁寧に教えて下さいました。私はと言えぱさっぱり解らず、休憩時



クリスマス食事会 (昭58.12)

間に皆様に教えて頂いたものです(感謝!!)。そんな私の楽しみは勉強の後一階の喫茶店でお喋りでした。皆様のお話を聞いているだけで勉強になりました。そんな中からどこそこの史跡に行こうとなり、いろんな所に連れて行って頂きました。まだ工事中の大峠、小国

なこんなで、一年に一度の恒例となり、次の年の佐渡も観光バスの行かない所を見て佐渡の歴史に触れ次は気仙沼大島と珍道中が続きました。参加して下さった皆様には数々の御迷惑と御無礼をお掛けしました。本当にありがとうございます。しかし一つも一番喜んで下さいました高橋素子先生が、今いらつしやらないのが、不思議であり、とても悲しくなりません。ご冥福をお祈り致します。こんな私にお声を掛けて下さいました、いつも優しい遠藤綺一郎先生、お世話になりましたの植木さんありがとうございます。これからも、益々楽しい会が未来永劫続きます様ご祈念しております。感謝!!

開設四十周年を迎えて

思うこと

高橋 豊

平成十八年は米沢古文書研究会発足以来四十周年に当たるとのこと、まことにおめでとございます。

このように長期に亘って文化的研究会が活動を継続しているのは極めて珍しいことと思いますが、会員の方々の熱心な研究活動の成果でありましょうが、私は会長さんやこれを助ける役員の方々、そして更に事務局の方々の熱意と創意工夫溢れた努力のお蔭と申し上げたいと思います。

古文書研究そのものが地味で現実離れで、更にかの忍耐力を必要としますので、多数の参加者を望むことは無理でしょうが、会の創立十周年（一九七六）を終えた昭和五十四年（一九七九）の時の市制九十周年記念行事の一つとしてスタートした米沢市史編纂の開始が古文書研究会の普及と研究活動に拍車をかけることとなったと思います。さらに役員の方々も会の二十代から三十代後半に入って運営にも創造力が加わった感が致します。

昭和六十二年には五月例会より一部と二部に分かれ、軍事・政治的なものと文化・嗜好的なものに分けて構成され、会議も理事会、幹事会、総会の構成で、協議の徹底化を図り、平成年間に入ってから、秋にはミニ講演会やミニ学習会を設け、その後

してゆくべきかという問題が一つと、現代社会人の心的変革より生ずる古文書不用論の台頭に対して如何に対応すべきかといった問題が一つであります。

この問題に対していかに処すべきか、これは四十周年記念を迎えた今日にあつて避けることの出来ない重要課題と言えるのですが、果たしていかがなものでしょうか。

懐かしい人達

高橋 淑子

四十周年になるのですか。おめでとうございます。学生時代にボランティアで市立米沢図書館の書庫内で終日古文書の整理をしたことがある。文書は写本、板本、漢籍等が多く、その内容など司書の資格を得ていたとはいえ、ほとんど理解できるものではなかった。それでも辞書を片手に指示されたとおりにカードにおこした。その中に「宋版史記」のような凄い物も入っていたことをずっと後になって知っ

の「秋の宴」で季節感を味わうようにした。例えば「曆あれこれ」「漢字の歴史」「陰陽五行説雑考」などがあり、また年一回の旅行プランを歴史・文学探訪を目的とした一泊二日を基準に提案し実施しているのが好評を得、会員の仲間意識の高揚を得ているのも、六月下旬から七月上旬にかけて季節と健康のバランスに注意してのプランも人気を得ている。

また図書館が主催する、福島大教授の「古文書解読講座」は毎年七月末の二日間欠く事なく開催され、解読の力を磨く貴重な機会として、会員はこれに積極的に参加してきた。勿論、会の例会を主として毎月第三土曜日の午後に「武將文書」を主教材として専ら地元の講師の指導によって会員相互の研究発表が行なわれており、開設以来の伝統的学習形態を採っているのは心強いと言えるのではないだろうかと思われまます。

こうして栄えある四十周年記念を迎えるに至った今日において、新たな悩みともいえる問題を抱えているのは注目しなければならぬでしょう。実は会長及び諸役員の高齢化という現実に対してどう対処した。

その後、米沢女子短期大学附属図書館に勤務し、ここにも多くの未整理の漢籍があり、中に地方文書の書状も含んでいた。

読解出来なければ整理もできない。困り果てていた時期に米沢古文書研究会の発会を知り、割と早い時期に入会した記憶がある。

テキストは上杉文書と言われる武家文書や地方文書が主だったが、内容については大方が記憶に止まっていない。だから思い出は懐かしい人達が主になつてくる。

○今泉先生と下平先生

お二人は会の重鎮で、今泉先生は論理的で下平先生は情義的だったように思う。各々が持ち味を出し、古文書の面白さを教えてくれた。今泉先生にはよく飲み会の同席を許され、知らない世代の話も聞けたし、下平先生には古山さん、素子さんと共に弁当持参で寺社巡りに連れて行っていただいた。

そうだ写真店の小貫さんは見合い写真を撮って下さったり、若い女性が少ないこともあり、多くの年

長者から親切を受けた。気が付けば自分があの頃のお二人の年令を過ぎていた。

○笹野観音通夜物語

研究会で数人づつの班を作り、文書を解説した年があり、私は、千喜良先生、猪野さんともう一人の方と「笹野観音通夜物語」を読んだ。これは後日、活字になったと思うし、手元にあるはずなのに探せない。月に一度米沢女子短大の図書館で学ぶのだが、商売している猪野さんも今一人の方もご用繁多で、よく千喜良先生と二人だけで模索した覚えがある。多勢で読むのと違い、責任があるので随分熱心にやった気がしている。

○小林先生

福島大学から小林先生という方が時々講師に見えられた。青白く痩せ型で本の虫のような方だと思っただ。大学からなのか上杉家と関係ある文書を持参され、机上に広げて解説された。そんな時、私は文書の中身より先生の手に気をとられている事が多かった。男性でもこんなに美しい指があるんだと感動し、遠くを見つめるような視線で思索しつつ言葉を口に

する姿はすてきだと乙女心に響いたのだと思う。ご健在だろうか。

○上杉家の殿様

米沢では上杉家の歴代藩主を「公」をつけずに呼ぶことはない。街角にトンカツ屋が出来、その店名が「かげかつ」だった。その時研究会の面々は罰当たりなどと怒っていた。

いつの頃からか上杉家のご当主と言われる白髪の美しい老紳士が米沢にお帰りになった。会の新年会の時に、宴たけなわになり上に端座されたご当主の前に、筒袖にモンペ姿の老会員が酒の力を借りて歩を進めたのか、平伏しつつの口上を聞き驚いた。

「もったいない事で、時が時ならこうして殿様と同席すらかなわなない身分の者が御前にご挨拶出来るなんてありがたいことです」

ご当主は「お手を挙げてください」としきりに言われてもなかなか面をあげない人達が並んだ。

その頃中心地から離れた地域から家に伝わる文書を読み解きたいという何人かが入会していた。ご先

祖が下役として上杉家にお仕えされていたのだろう。一瞬、城下町の心根深さと、時代劇を見ている思いだった。

思うがままに

中川正昭

入会して日は浅い。以前図書館主催の古文書解説講座に出席したが、何も知らない者が行ってはいけないのでした。

受講者達は相当古文書については知識が豊富であったようです。初心者には全く歯が立たないので途中で退席してしまいました。

途方にくれていた時、当会では初心者対象の「いろは塾」を開講することです。早速入会させていた

先輩の方々も親切に指導して下さり本当によかったと思いました。

入会したことをツレに報告したら、快く思ってくれたが、「ニヤリ」としたのです。

これにはいろいろ理由があるからなのです。どうしてか悪いクセがあるのです。

何事にも興味を示すのですが、熱中しやすく冷め

上杉公園の堀端にあった市の図書館のかび臭い書庫から始まった私の古文書との思いでも係わりも、いまや故人となられた多くの方々のご指導によるものとしみじみ思う。こうして臙げな記憶をかき回すと、どうでもよいような事が次々と出て来るが、四十年続いた研究会の運営は大変な奉仕に支えられていたことに気づく。

テキストの準備は、市立米沢図書館の司書が用意してくれていた。今なら民間の団体の仕事を職員が勤務中にやる等考えられないのだが、よい時代とも言える。

古山さん、菊池さん、植木さんには随分とご苦勞をおかけした。心から感謝申し上げます。

やすいのです。初めは釣りでした。釣り竿から浮きやら一通りの道具類を全部揃えないと気がすまないので集めるのですが、集め終わると熱が冷めてしまふのです。

次にはカメラですが、これも同じ結果で他にもいろいろあるのです。そのようなことで、又始まったなと思ひ、ツレは「ニヤリ」としたのです。しかし今度は初級クラスの古文書程度は解読できるようになりたいと思つています。

老脳なのか覚えても一晩寝ると次の日にはすっかり忘れることが多く、行つたり来つたり繰り返してなかなか進まないのが現状です。

ある時、面白いようにスラスラと読めるようになったのです。自分でもビックリする程読み進んでいくのです。得意になり、ツレにも読み聞かせているのですが、どうしても読めないところがあり、考え悩んでいると、次第に遠く消えていきどうしたものかと思ひ巡らしているうちに目が覚めたのでした。そうなのです。これはすべて夢の中のことだったのであります。しかし夢でもスラスラと読めたとい

創立四十周年記念に寄せて

仁科春七

一、私と古文書

米沢古文書研究会創立四十周年、誠におめでとうございます。

学生るとき、古文書演習という授業で手ほどきを受けたものの、退職するまで、古文書に触れる機会がないまま過ぎてきました。退職し、鈴木倉雄先生にお会いした時に、長井古文書研究会に入れていただきました。そのうちに、「米沢古文書研究会も面白いよ」との誘いを受けて、参加させていただいております。予習しては来るものの、なかなか読めないのです、学習会の当日、長井市から四人で弥平そば屋さんの二階で予習会をして、そばを食べてから参加してきましたが、芳賀さんは健康上、鈴木さんは亡くなり、長井からは二人になってしまいました。

古文書学習の基本を一通り学ぶことも大切だからとの勧めもあって、NHK学園の古文書講座の基礎

うことはとても楽しいもので心地よい目覚めでした。もともと国語はあまり好きな方ではなかったが、何とか今の歳まで世間は付き合ってくれました。残り時間はゆっくりと古文書の解読に費やしたいと思つています。

昔の人は素晴らしい物をもつていたので。丈夫な紙と墨と筆とで、こと細かく記録されているのでその時代の様子などを知ることができます。多くの人々は字の読めない、書けない人が多かったと思いますが、数多くの古文書として残っていますことはとてもすばらしいことです。これらに触れられるということは幸せなことと思います。

現在は体調がすぐれず欠席しておりますが、良くなりましたら出席しますので、よろしくご指導をお願いします。

当会の益々のご発展をお祈り申し上げます。

コースも受講してみました。この通信講座は、一定の期日までレポートを提出すること、誤字・脱字は訂正されるし、内容の理解不足は解答のミスとなつて返ってくるので、緊張して取り組むので頭の老化予防に大変良かったと思つています。レポートが赤くなるほど添削されて返ってくるのですが、あまり低い評価でなかったのが安心しています。少し文字が読めるようになって、書き手が変われば文字が変わり、文字には癖もあって読めなくなるので、市販されているものはなるべく買って読みたいと思つています。米沢での七家訴状、武将文書、新武将文書、大石家文書等の学習は雰囲気もよく、とても楽しく過ごすことができました。

二、研修旅行

たまたま、新潟県の村上史楽会の矢部さんと知り合いになりました。村上史楽会の世話係をしている方で、村上城（本庄城）のことには殊に詳しい方で、村上史楽会は古文書を読んだり、本庄様ゆかりの土地を訪ねて研修旅行をしているとの事でした。本庄氏についていろいろ説明して下さるのですが、私に

は初めて耳にする方であり、よく分らないままでした。それで、本庄氏について少し教えてほしいと頼んだところ、資料の一つとして、小説『阿賀の風雲・内陸編』（大嶋満夫著）を貸して下さいました。地方史の中にひっそりと埋もれている人物で、伝記なども少ないので、事件の背景を探るなどして人物の性格づけをしてまとめてみたが、あたらずとも遠からじだと著者は言っています。小説は史実とは違うことは当然です。本庄繁長、色部勝長、中条藤資等揚北の様子、長尾氏と上杉氏、上杉謙信や武田信玄との関係、川中島の戦い等で内容が展開し、謙信の関東進出、本庄繁長の謀反までが書かれている小説です。新潟県やその近隣の地名とその位置関係が分からないので、地図を見ながら読み進めてきました。揚北衆と言われる武将が存在したこと、守護代長尾氏が関東管領上杉氏を引き継いだいきさつ、長尾政景と宇佐美定行が野尻が池で水死したこと、長尾一族の中でも争いのあったこと、揚北衆と謙信・信玄との関係等、この小説を読んで初めて知ることが多かった。

この様な時に、米沢古文書研究会で上杉氏ゆかりの地に研修旅行に行くことになり、すぐに参加することになりました。

最初の見学地旧六日町では、郷土史家の大島先生が案内して下さいました。六日町は直江兼統と上杉景勝生誕の地ということで、市役所の前に二人の大きなレリーフ像が建てられていました。歴史的価値の在るものを観光に生かそうと住民も資金を出し合い、環境の整備に努めている熱意が感じられました。山頂の坂戸城跡まで良い道を作っているようですが、バスが大きくて上がれなかった。関東管領上杉顕定公が長尾為景に打たれて戦死したという所は管領塚史跡公園になっていました。長尾政景の墳墓、道宗塚には「長尾越前守」（明治六年有志者建之）の墓石が建っていました。長尾政景と宇佐美定行が水遊びして水死した野尻が池は湯沢町谷後の池だと言われてきたのですが、実際は六日町東泉田の淵であり、それは西の方の野田郷より流れてきた川が東の山に打ちあたる所に大きな淵ができ、ここで水遊びしたのだとのことでした。このあたりは、ぜんぶちと言

われており、現在は銭淵公園となっていていところであるとのことでした。宇佐美定行は小さな岩の主だったから、谷後の池というのは誤りであると大島先生は言われました。前掲の小説の中で、繁長に（宇佐美は野尻島の城将を拜命したばかりではないか。長野県の野尻島と水死した野尻池とは全く関係がないこと、二人は日頃仲が良くないのにどうして一緒に舟遊びに行ったのかなど）と言わせている。しかし、「定行は政景をさそって信越国境の野尻湖に遊んで水死した」（中村晃 P.H.P文庫）とあるのは不思議です。

二日目の見学地は旧与板町です。直江三代の居城だった山城・与板城跡は眺めても一望できないので、歴史資料館で模型地形図を見せていただきました。直江家を継いだ兼統の像は歴史資料館の前に雄々しく建っていました。

又、与板は良寛の父の出身地でもあり、良寛の歌碑も沢山あるそうです。良寛をこよなく愛した貞心尼の自筆の本『蓮の露』や『良寛道人遺稿』を読んだことがあるので、『良寛の書簡と詩歌』（与板町文

化財調査会）と歌碑の拓本を一枚買ってきました。また、『与板城と直江実綱・綱信』（与板町教委）という小冊子にも古文書の写真と読み下し文と解説文が載っていたので買ってきました。しかし、どちらの冊子も文字が小さいので、拡大鏡を使いながら苦労して読んでいるところです。

米沢古文書研究会が益々発展し、いろいろ教えて頂けることを願っております。

偶 感

芳 賀 勝 助

体に不調を来たして米沢と長井の両古文書研究会を休み、引き続いて退会せざるを得なくなつて数年を経た私に寄稿の機を与えてくださった事に先ずお礼を申し上げなければなりません。日常生活はなんとか過ごせるようになりましたが、歩行が困難で杖を使わずには歩けなく、特に段差は大変です（中風ではありません）。お医者に行く時のほかは戸の口

三寸外には出ることもなく、家に閉籠^{とこも}ってばかりいて、従ってペンを持つのも久しぶりです。

さて、私が貴会に入れて頂いたのは、昭和五十年代の早い時期ではなかったかと思いますが、定かではありません。古文書解説講座が米沢図書館であるから、受講したらどうかと長井古文書研究会の講師であった川村吉弥先生からのお勧めで昭和四十九年八月の講座から毎年かかさず平成十五年の夏まで受講した。

講師は福島大学の小林清治先生であった。丁寧な、そして少しもゆるがせにしない読みや解釈に受講生も懸命にうけていた。これがご縁で後に私が編した『近世古文書辞典—米沢領』に序文をお寄せ戴き、またアドバイスも頂くなど誠に有難い仕合せでした。

また、毎月の勉強会は月二回あって一部と二部に分かれ、二部はほんの初心者と、そうでない一部とでどちらかを択んで或は両方を勉強するというふうでした。この頃の講師は今泉亨吉先生であったと思う。場所は上杉本邸の西にあった図書館の二階の間で、冬などは二階への階段を吹き上^{のぼ}ってくる寒風

「米沢古文書研究会」と

出会って

本間とみ

「遠い小国町から、米沢市まで、どうして？」と人に聞かれることがある。自分でもそう思うことがある。月に一度の勉強会といえは簡単だが、電車でもとなると容易ではない。

入会の動機は、米沢市在住の縮桂子さんの勧誘によるものである。彼女とは同級生で、昭和五十二年の春一緒に教職を辞した。

主人は昭和四十三年から東京本社で単身赴任中だったから、束縛されることもないしと即座に応じ、おまけに当時米沢市に発足したばかりの劇団「北芸」にも入会した。

古文書の先生は下平先生で、『ジョン万次郎漂流記』などを教えていただいた。電車の時間が早いのでセンターの教室で待っていると、先生は定刻より早くおいでになって、小国町の話をなされた。小国

に震えながらの勉強であった。テキストは、近頃文化財に指定になった上杉家武将文書が主であり、上杉家の御当主隆憲様も会員であられ、この図書館の勉強会にご一緒した事も一度はあったと記憶する。

また、春秋二回、懇親を深める為の盃を交わす会合にも御出席されてお流れを下された。これも米沢古文書研究会に名を連ねている者の特権と言えるだろうか。

今秋、四十周年を記念した会を催されるとのことですが、一口に四十年といっても、ほんの一瞬の事のようにもあり、随分長い期間の事でもあるように、今、その折に出版される記念誌への原稿を書いていると、その時々模様が走馬灯のように眼前に浮かんできます。懐かしく思い起こさせます。いろいろお世話下さった物故者の方々も笑顔を見せて下さいました。感無量です。御会の益々のご隆盛と会員及び関係の方々のご健勝を祈りながら擲筆します。

町の高等学校に勤務されたことがあるとかで、とても詳しくかった。

八月になると、集中講義の勉強会（「古文書解説講座」）があつて、他県の大学の先生が教えて下さる。

二日間みっちり勉強だ。初日に膨大な資料の配布があつて目をまわした。縮さんと必死になって仮名ふりをしたが追いつけるものではない。

予習、復習なし、古文書の基礎知識なしの生徒では無理な話であつた。二年で音を上げて三年目からは集中講義は欠席した。

その頃になると友人の縮さんは、家庭の事情、身体故障などで退会した。「北芸」も解散した。だが、わたしは残った。

そもそのわたしが古文書に興味を持った理由が次のようなものだからである。

婚家の過去帳に大正八、九年に没した泰蔵という男子の記載がある。記憶している人も少ないが、かなり数奇な運命を辿った人物のようだ。若い頃、仙台市で水商売をして産を成したが、実家の兄が若くして死亡したので一大事ということで財産を二分し

て奥さんと離婚して実家に帰ってきた。

子供は無くして養女がいたらしい。衣服、家財の他に当時の金で二千円という現金を持って来たと言う。

その奥さんか養女の書いた手紙が残っていたのである。巻紙に変体仮名。わたしには拾い読みしかできない。「誰か読める人に読んでもらおうか」と舅に聞いたら、「悪いことでも書いてあると……」。自分も読めない舅は逡巡する。その時からこの手紙を読めるように古文書を勉強するという遠大な計画を立てたわけである。

昭和六十年に主人が退職して小国に帰ってきた。身辺あわただしくなり古文書研究会に出席するのは行事の時だけという有様。

それでも受け入れてもらえるのは会員の方々の寛容さのおかげかもしれない。それ程深いおつき合いをしているわけでもないが、植木さんをはじめ会員のお一人、お一人言うに言われぬ魅力があるのだ。そのおかげで退会もしないで現在に至った。不思議なことである。

古文書との出会いと感動

山岸久悦

当会創立四十周年の由ですが、小生僅か十年のお付き合いですからまだまだお邪魔虫でお恥ずかしい限りです。退職して「郷土の歴史を」知りたいものと「ふるさと歴史講座」を受講しましたが、観光ガイド養成講座を兼ねており、平成七年から手さぐりで観光案内を始めました。

郷土歴史の書籍を読み漁ってりましたが、平成七年七月、図書館の「古文書入門講座」が古文書との出会いでした。「御代々御式目(元禄十五年十二月二十三日) 吉良上野介様一件命令」でしたから、高橋豊先生の懇切な解説には「忠臣蔵」が米沢の記録に残されていることに感動したのを覚えております。そして、古文書研究会の二部から一部へ、さらに図書館の夏期解読講座やNHK通信講座と、くずし字が全然読めずに途方に暮れながらも、何時になったら文字が見えて来るのかと、菌がゆい思いが今な

お続いております。

歴代の講師の先生のお陰で感激することが出来ました教材文書を述べますと、「上杉景勝文書(天正六年三月二十三日付)で、三月十三日謙信死去十日後、実城に入るか否か去就に迷う心情を吐露している内容で、「お館の乱」開戦の発端となる文書であります。

また、寛文四年閏五月、三代藩主綱勝が急逝し、四代綱憲(吉良上野介長男)へと続く藩存亡の経緯を綴った「削封日記・千坂兵部記録」や、鷹山公入部最初の試練であった「七家騒動」の発端の訴状である「七家諫争状」では鷹山公の困惑が伝わってくる思いでした。

当会では繰り返し読み続けられている由の、「上杉家文書」は今、天正末から文祿・慶長へとさしかかり、太閤関白の重臣「景勝」の時期ですから、歴史資料としての文書の中身は、量、質ともに圧倒される思いです。どうか手を引いてご指導戴きたいものでございます。

私にとって幸いだったのは、職場の先輩である山王堂氏(現二部講師)にわがまま放題に指導をして

頂いた事でした。氏との巡り合わせがなければ、古文書の感動には触れる事なく老年が過ぎたに違いありません。

古文書を実際に読むことによって、歴史をじかに感ずることが出来る楽しみは、観光ガイドの大きな自信となるものであり、さらに例えようもなく頭の活性化にもなって、幾分なりとも老化防止になっているものと思ひながら筆を置きます。

五人組寄合帳にみる 米沢藩窮乏の歴史

米野一雄

豊臣政権下五大老の一員であった上杉景勝公は、秀頼の後ろ楯となって奥州の関ヶ原と云われる「最上戦」で戦うが、同盟した石田三成が関ヶ原戦で全滅すると、徳川家康の天下となる。敵対した大名の戦後処理は誠に厳しく、ことごとく大減封の上、辺地へと追いやられる。会津百二十万石の景勝公は四

分の一の米沢三十万石へと転封申渡され苦難の道を歩み始める。更に、四代藩主綱勝公が若年急逝なされると、又々半減の十五万石を命ぜられるが、家臣の召し放ちはなく、藩財政は益々苦しくなります。

九代藩主重定公時代、失政もあって財政の窮乏その極に達し、「藩を幕府に返上する外なし」と決断したが、尾張公のご説得で取止めとなった。宝暦、明和期の三十数年間だけでも数度の普請お手伝いがあり、国元では飢饉相次ぎ農民の暴動が起きる。

国家再建を目指された十代藩主治憲公が、「大儉令」を打出されると、旧格を重んずる重臣達は「七家騒動」を起こしますが、公の断固たる決意で難は逃れた。

公は藩主在任十七年間、三十八歳で治広公に藩主の座を譲られ、御隠殿餐霞館へ移られます。治憲公の大儉令実施で莫大な借金は返済されたが、藩の窮乏は相変わらずで、治広公は「永年半知借上げで迷惑をかけているが、猶一層の儉約で急場を凌ぎたい」との上意書を仰せ出され、武家社会では珍しい藩の収入の半高で国政を賄う制度を発表され、まず藩庁

役人の人員整理から始められた。武家社会五人組制度を新設され、組中の相互扶助、服装の贅沢、武具の美を戒め、君前でも洗衣は可、嫁入りは風呂敷包みのみ、一汁二菜、酒席の禁止、盆行事の自粛、土産物や餞別の禁止など仰せ出されている。

大儉令の実施、殖産興業の実施で藩の再建を図ってきたが、仲々実績は上らず、更に領民一般にも呼掛けられ、享和元年二月、町在五什組合の条約書を板行して、戸毎に配布されている。二百数十年に及ぶこの布令に、藩内の領民は律儀に従い、過酷な迄の質素な生活に耐えた歴史は、この武家五人組合帳に見る限り、実に寒々とした規則づくめの中で生活し、一挙手一投足に至る迄取締まりを受けているが、果たして人間性にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

陰の声は一樣ではないが、偏屈、頑固、消極的と評されるのも一理がある様な気がする。明治維新で暴れ廻ったあの雲井龍雄は「米沢人は旧態依然で、門閥のみを賢とし、格式のみ正とし、進歩なく意気消沈し容儀のみむさぼり、眼を遠望に注ぐ者なし」となりました。

と、中央政界に飛出してしまっている。此辺に隠忍自重のみ強いられた民衆の姿が残っているような気がするのである。

参考文献 「天保十四年二月 五人組寄合帳 組外巻番組」 藤田惟孝(控) より

初級講座の思い出

和田 節子

古文書研究会の創立四十周年、おめでとうございます。私が在籍していましたのは大分前のことになりました。私、また八年間だけでしたので、この度の原稿依頼にはとても恐縮しております。

ただこれを機会に、あれやこれやと思いついていきますと、初級講座のあの活気に満ちていた頃と、私が初めての育児に奮闘していた時期とが重なることありまして、ひとしお懐かしさが増してまいります。

廻りまして、私の初級講座との関わりは、昭和五

十七年に始まります。縁あって米沢市史編さん室に勤務させていただいた私は、時を同じくして、開講したばかりの初級古文書講座のお手伝い(会員の方への葉書案内や会場準備等)をさせていただくこととなりました。

さて、初級講座の講師は高橋素子先生でいらっしやいました。あの知的で華やかな上にも親しみのある雰囲気は、そのまま講座にも反映しておりました。教室内は、会員の方が真摯な姿勢で講義を受けられるなか、終始なごやかな空気に満ちていました。会員の大方は女性でしたが、少数派である男性の方も活発に質疑応答をしてくださいます。講座を大いに盛り上げてくださいました。

テキストは最初の頃、上杉鷹山の『南亭余韻』と平行して、『源氏物語』や『土佐日記』『奥の細道』なども用いておりました。が、次第に、米沢出身の泉崎真畔の『飯豊の山ぶみ』を用いるに及んで、「上級」と掛け持ちという方も何人かおられるようになってきました。

初級講座はまた、レクリエーションにも一生懸命

でした。春夏秋冬それぞれに行事がありました。なかでも新年会では、「古文書研究会なんだから、勉強もしなくちゃね」と着物姿も美しい素子先生が、即座に『米沢本 百人一首抄』の講義をしてくださるのが常でした。春の酒席では、詩吟を朗朗と披露してくださいる男性の方もおられました。



和田さんを囲んで（平2. 9）

こうして振り返ってみますと、私が古文書研究会のお手伝いを止めさせていたから、もう十六年の歳月が流れております。この間、講師であられた高橋素子先生はお亡くなりになられ、また他にも故人となられた方がおられることを耳

にしますと、寂しい思いが募つてまいります。けれども、私があつた頃、研究会を通じて多くの方と貴重な時間をご一緒させていただいたということは、本当に幸せなことであつたと、今にしてしみじみと思われてきます。最後に、古文書研究会がこれからも末長く活動、発展していけますよう、切に願つております。

●故高橋素子さんの在りし日の文章

古文書研究会と下平先生

故高橋素子

私は、下平先生のお年は六十四才であると、何となく思っていた。多分、先生に初めてお逢いした頃、その位のお年だったからなのだろう。亡くなつてから八十才と伺つてびっくりした。それほど年月がたつていたので。

福島大学の小林清治教授の古文書解説講座が、米沢で四回目を迎えた頃、古文書研究会は生まれた。年に一回の小林先生の解説講座だけでは、なかなか古文書が読めるようにはならない。せめて、月に一回位は集まつて、古文書に親しもうと、下平先生、今泉先生を中心に十人ぐらいが集まつて始まつたのである。

場所は、今泉先生が仕事をしていらつしやる上

杉家事務所である。庭に鶏頭が燃えるように咲いていたのを覚えている。

それから私達は本格的に古文書に親しみ、読み方を覚えてゆくことになつたのだが、古文書研究会が現在までなかなか雰囲気を持つて続いている原因は、両先生のお人柄と共に、最初からあつた、皆で一緒に飲んだり、食べたりする習慣ではなかつたかと思う。

春は花見、秋は芋煮会と、現在でもやっているが、前は材料を買つてきて、自分たちで料理したものである。それは必然的に、僅か二、三人しかいない女性会員の仕事になるが、それも楽しい作業だつた。何しろ、上杉家事務所の台所は、五十年前の台所みたいなもので、ギイコ、ギイコ音かする押しポンプで水を汲むのである。流しもそれにふさわしい代物で、組板と庖丁があるから、何となく用は足せるような気になるのである。

ある時、芋煮会というもの、元来、男性が作つて、ふだんお世話になつてゐる女性に御馳走する

ものだ、と言い出した人があって、古文書研究会も早速、実行することになった。女性三人は、何もしなくていい、出来上がるまで坐って待っていてほしい、と言われても、座り心地の悪いことおびた。普段、お宅でお料理などなさった事がある先生方なのかどうか。それでも、大鍋いっぱいのお芋煮が出来上がってきた時は、本当にほっとした。

責任を果たした先生方は、殊の外、お酒が美味しかったようである。

こういう席で、まず陽気に唄い出されるのが今泉先生である。それから

へ白鳥は かなしからずや…

と、朗朗と唄うのは青木先生。子供の頃育った沖繩を唄んで、沖繩の歌を唄うのが千喜良先生。下平先生はなかなか唄おうとはなさらないが、それでも止むを得ず唄う時の歌は、謙信公の歌「霜台公」である。古文書研究会には元校長という立場の方が多から、こういうときに唄う歌には「校長ワルツ」などというの飛び出して来る。昔流

雪の降る寒い日には

「炬燵に入って、うなぎでも食べましょうか」

と、可奈免に上りこむことになり、爽やかな風の吹き通る夕方、塩井の鯉屋の二階にいたこともある。

こうやって書いていると、古文書研究会は、のんびり食べたりばかりしているようだが、そうではない。どんな会がある時でも、少なくとも、一時間は勉強すること、というのが不文律なのである。笹野観音の境内で、芋煮の大鍋がぐつぐつ煮えているのを気にしながら、上杉文書を読んでいたこともあるし、隣の部屋の嬌声がうるさくて、古文書を読んでいる声がかき消されてしまった事もある。何よりも、宴会の御馳走一式がずらりと並んだテーブルを前にして、真面目な顔をして勉強をしているというのが古文書研究会の真骨頂なのである。そしてすました顔をして、それを実行してきたのが、下平先生なのである。

二、三年前、増えてきた女性会員が中心になっ

行した「芸者ワルツ」の替え歌である。校長の哀歎を唄っていて、なかなか良い歌だから、教えてほしいとお願ひしたら、下平先生はきちんと一番から三番まで紙に書いて下さった。歌詞を覚えるのが苦手な私が、今でも「校長ワルツ」だけはちゃんと覚えているのは、この時、下平先生が書いて下さったおかげである。

上杉家事務所が手狭になると、会場は元の図書館に移ることになる。その頃から、例会が終ってからそのまま別れるのが心残りになり、有志が二次会に流れるということになるのである。

「今日は暑い日でしたね。帰りに生ビールでもいかがですか？」

誰かが言い出すと、即座に

「それは良いですね」

と賛成する。つき合いの良い人が数人いて、その中心が下平先生と今泉先生なのである。何ということはない。生ビールのジョッキを前にして、一時間ぐらい皆でおしゃべりをして、それからやっと「さよなら」と別れて行くのである。

て、飯豊山麓の梅花皮荘に一泊したことがある。

この時、下平先生は泊らずに、米沢にお戻りになったが、その精神は、ちゃんと受けつがれていたのである。

「今日は、折角泊りがけで来たのだから、勉強はお休みにしましょうよ」

などと怠けようとしている私達に、長谷部先生は断乎として宣言なさったのである。

「どんなに遊ぶ時でも、その前に一時間は勉強をするというのが、古文書研究会の伝統でしょう。折角、準備をしてきたのですから、一応勉強だけはしましょう」

反対もむなしく、私達は勉強の座につかされてしまったのである。

下平先生が作って下さった、古文書研究会の精神は健在である。いつまでも。

—「置賜文化」第七十二号（昭和五七・十二）より転載

古文書研究会記録（抜粹）

岩槻代寿

私は米沢古文書研究会に入れて頂いたものの、何が何だかどこをどう読むのか、句読点なしの文書はさっぱり判らず、「出席することに意義有り」と心を決め、月一回の学習会には休まず出席致しました。そんな月日が数年間続いて、漸く古文書研究会の雰囲気馴染む事が出来、下平才次先生、今泉亨吉先生、高橋素子先生、青木茂先生に温かい励ましのお声をかけて戴く様になりました。早く先生方のお話を理解したい、一字でも読める様になりたいと思ひ学習会

の様子を簡単に記録する事にしました。
昭和五十年四月から昭和六十年七月迄の十年間の記録です。こんな稚拙な記録の中から心に残った期間を一、二抜粹してみてもとのこと、学習会がお濠の傍の旧図書館から文化センターに移ったのも昭和五十三年十二月、旧図書館二階細井平州先生書「友于堂」の額の前での百人一首抄の学習会、共に学ばれた上杉隆憲様のお姿も懐かしく、その佩書き写すことにしました。

昭和五十年四月十九日（土） 午後一時三〇分

一 テキストの進行

・百人一首抄

紫式部（めぐりあいてみしやそれ共）

大貳三位（ありま山いななささら）

赤染衛門（やすらはでねなましものを）

小式部内（おほえ山いく野の道の）

伊勢太輔（いにしへのならの都の）

・鉄砲一卷のこと

三〇枚目の 一、昔切米いたされ候事より、

三八枚目の 一、心付の毎年の儀に候く如在申さざるためと被仕候事まで。

一 下平先生より、明年十周年記念行事（古文書研究会発足）として今までのまとめ出版についての意見が囃られた。種々意見が出されたがまだいろいろ考える事ありとて準備委員会を設置する事に決定。準備委員がある程度骨組を立てて五月の例会に提出する事に決める。準備委員会は次の各氏に依頼。下平先生 今泉先生 高橋素子さん
小野栄さん 千喜良先生

一 四月の例会出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 梅津信治 植木伸子 高橋素子 遠藤綺一郎 楠川実 高橋淑子 川上正澄 小野栄 千喜良英二 渡部恵吉 坂野進 平賀新太郎 渡部孝一 後藤惣一 佐藤直二郎 岩槻代寿

昭和五十年五月二十四日（土）

場所 関根 山水荘

一 恒例の花見懇親会に十二名出席

高橋素子氏、長谷部善作氏より各清酒一本

植木伸子氏より一金貳千円の志あり。

一 テキストの進行

・百人一首抄

清少納言（夜をこめて鳥のそらねははかる）
左京大夫道雅（いまはただ思ひたへなむと）
権大納言定頼（朝ぼらけ宇治の河霧）

一 下平先生より報告

先月よりの宿題である十周年記念行事について準備委員会のまとめを報告、遠藤先生はじめ各氏より種々意見が出されたが結局次の様に決定する。
1 百人一首抄の写真印刷とその読みくだしと頭注。
2 B五版和綴とし裏表紙内にポケットをつけ解説書を入れる。
3 頒布価一、八〇〇円、会員一人十冊を引受け販売する。
4 先月決定した委員に新たに遠藤綺一郎先生、渡

部恵吉先生が加わることになった。

一 出席者氏名

下平才次 梅津信治 遠藤綺一郎 青木茂 高橋素子 渡部恵吉 菅原正美 後藤惣一 長谷部善作 渡部孝一 佐藤直二郎 岩槻代寿

昭和五十年六月二十一日(土) 午後一時三十分

一 テキストの進行

・百人一首抄

相模(宇らみ侘ほさぬ袖だに有物を)

大僧正行尊(春の夜の夢ばかりなる手枕に)

三條院御製(心にもあらで憂世にながらへ)

能因法師(あらし吹みむろの山のみちち葉)

良暹法師(さびしさに宿をたち出て詠れは)

・この後出版委員会を開くために定刻より早く終わる。

一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 梅津信治 高橋素子 遠藤綺一郎 千喜良英二 長谷部善作 菅原正美 小野栄 平賀新太郎 渡部孝一 岩槻代寿

栗林一雪 植木伸子 岩槻代寿

一 八月は山形、九月は米沢の「古文書解説講座」で休み

昭和五十年十月十八日(土) いも煮会

一 ところ 一念峯上海上

一 会費 一、五〇〇円

十二時三十分旧図書館出発、曇天であつたが一念峯は紅葉はじめ、地元渡部孝一氏の好意により準備万端整えられ、和氣藹々のうちに先ず下平先生より簡単に一念峯の由来説明があり、三時三十分散会した。

一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 梅津信治 菅原正美 青木茂 高橋素子 千喜良英二 渡部恵吉 長谷部善作 小野栄 後藤惣一 渡部孝一 平賀新太郎 岩槻代寿

昭和五十年七月十九日(土) 午後一時三十分

一 テキストの進行

・百人一首抄

大納言経信(夕されば門田のいな葉)

祐子内親王家紀伊女(をとに聞たかしの)

権中納言匡房(高砂のおのへのさくら)

源俊頼朝臣(うかりける人をはつせの)

藤原基俊(地きりをさしさせもがつゆを)

・鉄砲一巻のこと

テキスト一応読み終わる

鉄砲のことは、質問には後日答えることにする。

今回をもつて終る。

一 下平先生よりの連絡事項

八月は山形市で古文書解説講座開催につき、休みとする。(山形図書館で一日(四日まで))

恒例の古文書解説講座は現在小林先生の方へ問合せ中なので、九月か十月に開催する予定である。

一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 遠藤綺一郎 小野栄 川上正澄 黒田明雄 平賀新太郎 楠川実 渡部孝一

昭和五十年十一月十五日(土) 午後一時三十分

一 テキストの進行

・百人一首抄

法性寺入道関白太政大臣(和田の原こぎ出)

崇徳院御製(瀬をはやみ岩にせかるる)

源兼昌(あハち嶋かよふ千どりのなく声に)

左京大夫顕輔(秋風にたなびく雲のたえま)

・寛政改革の執行帳

三枚目の半分(九月迄は色々様々無理)迄

一 下平先生表彰祝賀会(米沢市より表彰)

例会終了後午後四時より招湯苑にて祝賀会を開催した。

一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 梅津信治 井形朝良 遠藤綺一郎 高橋素子 坂野進 川上正澄 千喜良英二 渡部孝一 小野栄 植木伸子 楠川実 黒田明雄 岩槻代寿

一 この間の記事略

昭和五十一年四月二十七日

- 一 テキストの進行
- ・せめて話草

二枚目の最後の行（上杉入道謙信殿輝虎は小男にて左足腫気ありて）ゝ七枚目三行（申付られしとそ、雑話もしほ草）まで。

- 一 下平先生より今年度の会費の件で提案有り。相談の結果昨年度七〇〇円を改め一、〇〇〇と決定。
- 一 高橋素子さんより提案あり。下平先生このたび文化懇話会より文化功労賞を受賞なされる事になりましたので五月の例会花見をかねて祝賀会を開催する事にする旨決定。

- 一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 川上正澄 渡部恵吉 高橋素子 長谷部善作 坂野進 渡部孝一 栗林一雪 平賀新太郎 楠川実 岩槻代寿

昭和五十一年五月二十二日（午後二時）

於 会津屋

会費 二、八〇〇円也

- 一 テキストの進行

・謙信公書状 二枚

- 一 下平先生文化功労賞祝賀会及び花見の宴

・恒例の福島大教授小林先生の解読講座開催の件で昨年度までは米沢市からの負担金があったが今年度は赤字財政のため、負担金の見込みがないので解読講座の開催について話し合いがなされた。高橋素子さんの提案で古文書研究会として米沢市からの補助金がなくても開催したい旨を下平、今泉両先生に相談する。

- 一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 高橋素子 梅津信治 遠藤綺一郎 楠川実 植木伸子 菅原正美 長谷部善作 藤田守 山田武雄 渡部孝一 平賀新太郎 小野栄 佐藤直二郎 岩槻代寿

昭和五十一年六月十九日（土） 一時三十分

- 一 テキストの進行

・せめて話草

七枚目の四行（上杉弾正大弼治憲隠居して越後

守と称す）ゝ八枚目五行（おもてなしありて咄させ給ひし也）まで。

- ・景勝公書状 三枚

・あなかしこの定義について

高橋素子さんが調べて下さり（前回論議された）欠席のため遠藤綺一郎先生より披露された。女性言葉としても用いられることあり。一般にあなかしこ、あら、かしこ等は女性ことばとして用いられるものと解していた。

- 一 先日提案あった福島大学教授小林先生の古文書解読講座を八月ゝ十月までの間に開催する事に決定した旨下平先生より報告あり。

- 一 出席者氏名

下平才次 青木茂 遠藤綺一郎 梅津信治 長谷部善作 楠川実 平賀新太郎 坂野進 千喜良英 二 大石英一 岩槻代寿

昭和五十一年七月十日（土） 午後一時三十分

- 一 テキストの進行

・せめて話草

- 一 テキストの進行

・謙信公書状 二枚

- 一 下平先生文化功労賞祝賀会及び花見の宴

・恒例の福島大教授小林先生の解読講座開催の件で昨年度までは米沢市からの負担金があったが今年度は赤字財政のため、負担金の見込みがないので解読講座の開催について話し合いがなされた。高橋素子さんの提案で古文書研究会として米沢市からの補助金がなくても開催したい旨を下平、今泉両先生に相談する。

- 一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 高橋素子 梅津信治 遠藤綺一郎 楠川実 植木伸子 菅原正美 長谷部善作 藤田守 山田武雄 渡部孝一 平賀新太郎 小野栄 佐藤直二郎 岩槻代寿

昭和五十一年六月十九日（土） 一時三十分

- 一 テキストの進行

・せめて話草

七枚目の四行（上杉弾正大弼治憲隠居して越後

八枚目六行（上杉弾正大弼殿治憲九拾以上の老人御手当の事）ゝ十枚目（又ふかさおぼしめしもありしなるべし）まで。

- ・三時より上杉博物館に於て開催中の上杉家古文書展（武将）を見学する。

- 一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 遠藤綺一郎 坂野進 井形朝良 大石英一 長谷部善作 藤田守 渡部孝一 岩槻代寿

昭和五十一年八月二十一日（土） 午後一時三十分

- 一 テキストの進行

・せめて話草

十枚目（上杉弾正大弼殿治憲江戸に在し時の事なり）ゝ十四枚目一行（爰にことわりて有の儘を記しぬ）まで。

- 一 下平先生より百人一首抄の件でお話あり。百人一首抄が九月初めに印刷完成する。前に一部一、八〇〇円ときめたが一部二、〇〇〇円で頒布することに決定する。

一 出席者氏名

下平才次 青木茂 梅津信治 長谷部善作 遠藤
綺一郎 菅原正美 藤田守 大石英一 高橋素子
佐藤直二郎 小野栄 川上正澄 平賀新太郎 岩
槻代寿

昭和五十一年九月十八日(土) 午後一時三十分

一 テキストの進行

・せめて話草

十四枚目二行(上杉弾正大弼殿治憲何かれの御慎
常々の事は記に暇あらず)十八枚目真中より(三
行風流なる皆筆には及かたくなむ)まで

一 百人一首抄出版について

・米沢本百人一首抄はいよいよ出版された。解説と
注釈の別冊付二冊で古文書研究会には一部二冊
で二千円で頒布する事にした。七百五十部限定版。
(後からの注。実際は七百部出版となる。)

下平先生よりも、出版委員の方々の御苦勞には心
より感謝申し上げます。それから遠藤綺一
郎先生にはとくに注釈をお願いし、御礼も差上げ

ることが出来ない事を会員一同申し訳なく思う。

本当に有難うございました。

一 出版記念を兼ねても煮会を十月に開催するこ
とに決める。

一 出席者氏名

下平才次 青木茂 遠藤綺一郎 梅津信治 川上
正澄 坂野進 長谷部善作 渡部恵吉 大石英一
小野栄 平賀新太郎 渡部孝一 藤田守 楠川実
青木美枝子 岩槻代寿
・今月より青木美枝子さんが入会する。

昭和五十一年十月九日(土) 午後一時三十分

一 テキストの進行

・せめて話草

十八枚目四行目(上杉弾正大弼殿治憲御国におハ
せし時は)二十二枚目五行(板屏の作事はやみ
に成りぬ)まで

一 百人一首抄を兼ねて芋煮会を左記の通り行う。

日時 十月九日午後一時三十分

場所 招湯苑 会費二、五〇〇円

・百人一首抄出版は大好評で売り切れとなり会員一

同喜びに耐えない。改めて大変苦勞なされた編集
委員の方々に感謝する。

・置賜史談会 茂吉文化賞受賞に輝く。

一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 青木茂 梅津信治 渡部恵
吉 高橋素子 遠藤綺一郎 小野栄 青木茂 長
谷部善作 千喜良英二 平賀新太郎 渡部孝一
青木美枝子 岩槻代寿

一 この間の記事略

昭和五十二年九月十七日(土) 於旧図書館

一 テキストの進行

・漂客談奇

十五枚目五行(爰にて船主銀錢二十五枚を出し蒸
気船をかり一夜に入海を百五里斗遡り)十九枚
目終わりまで。(第一話終り)

一 下平先生より提案あり。

・百人一首抄再版のこと。(五百部の再版決定)

・恒例のいも煮会のこと。(十月十五日ごろ山水荘
の予定)

一 出席者氏名

下平才次 今泉亨吉 植木伸子 川上正澄 遠藤
綺一郎 坂野進 井形朝良 小山栄 佐藤直二郎
長谷部善作 平賀新太郎 縮桂子 高橋和子 岩
槻代寿

昭和五十二年十月十五日(土) 於関根山水荘

一 いも煮会開催

親睦をかねて恒例のいも煮会を開催

一 日時 十月十五日

一 場所 関根山水荘

一 会費 三千円

送迎バスのおくれで時間の関係上勉強会はとりや
めて直ちに懇親会にうつる。

一 下平先生よりテキストについてお話あり。上杉
家より戦国武将の文書をまとめて拝借して解説す
る旨、会員賛成し御礼金二万円位とのこと。

一 出席者氏名

の旅行修研 思い出

下平才次 遠藤綺一郎 高橋素子 楠川実 今泉
亨吉 千喜良英二 渡部恵吉 小山栄 長谷部善
作 平賀新太郎 佐藤直二郎 渡部孝一 井形朝
良 高橋和子 岩槻代寿 以上十五名

昭和五十二年十一月十九日(土) 於旧図書館

一 テキストの進行

・戦国武将文書中No.4の謙信公より太田美濃守殿苑
書状一通

・漂客談奇

十九枚目第二談はじめより二十一枚目の五行まで。
日本にては共和州と申候由王都は「ヌヨヲカ」(今
のニューヨークのこと)といふ所にて萬次郎罷在
候「サアヘーブン」数十里西南へ当り申候?

一 上杉様も当古文書研究会へ

下平先生よりのお話で戦国武将文書のコピーをお
願いに上杉様に参上したところ、早速快諾され今
日から勉強することが出来ました。上杉様には一
緒に御勉強なされたいとお心なので今日から共
に会にお入りなさいました。自己紹介をかねて一

人一人上杉様に御挨拶を行い、上杉様も挨拶をか
えされました。

一 出席者氏名

上杉様 下平才次 今泉亨吉 遠藤綺一郎 梅津
信治 楠川実 高橋素子 長谷部善作 川上正澄
坂野進 本間とみ 平賀新太郎 小野栄 藤田守
大石英一 佐藤直二郎 縮桂子 植木伸子 亀田
弘 高橋和子 小山栄 岩槻代寿 以上二十二名



「吉良さん」への熱き思い

本間とみ

「この日から三百年の時が移り…」、毎週日曜夜の
NHK大河ドラマ「元祿繚乱」が終わったあと、関
係の深い現代の様子が放映される。今週は山形・米
沢で色部又四郎の關係が放映された。今週は特に複
雑な思いでわたしは観た。

米沢古文書研究会の恒例の研修旅行が、今年は今
在の愛知県吉良町を尋ね上杉家とゆかりの深かった
吉良家の菩提寺や墓所を参拝するということだった
からである。

参加するかどうか、ずいぶん迷ったがこの機会を
見送れば生涯に悔いを残すと思ひ、連れて行つても
らうことを決意した。

わたしの頭の中の吉良上野介は「元祿繚乱」や「忠
臣蔵」歌舞伎での悪人上野介で、それ以外の人物と
しては何も考えられなかった。

ところが、この町に入ってからこの固定観念はすっかり崩れてしまった。

今回の計画をお立てになった古文書研究会の会長、上杉虎雄氏の御威光もさることながら、二日間の日程に快く付き合って下さった大溪先生の人物力量・吉良町の生き字引のような方にすっかり感動した。

先生は、元吉良町小学校の校長をなさって、その後教育長、そして現在は町史編纂の委員長をなさっておられるという。過去に何人もの校長をなさった



華蔵寺 (平11.7)

方とお付き合いをしたが、この先生程の学識が深く郷土を愛している方とははじめてお目にかかった。大溪先生も、東条吉良氏の菩提寺「花岳寺」住職鈴木悦道氏も、説明なさる時は「吉良さ

ん」とおっしゃる。後でいただいた吉良公史跡保存会で出された資料「追慕熄まず 吉良上野介義央公」を読んだら巻頭に「吉良町では吉良上野介義央公を吉良さんと呼び慣わしている」とあり、次頁に「吉良町では吉良さんは名君である」と書いてある。そして数々の善政が述べられ義央公がいかに領民を考えておられたかが理解されるようになっていく。

これ程の名君が長年月に渡り悪人として扱われてきたことには、わたしも理不尽を感じないわけにはいかなかった。

どの寺の墓所だったか、大正・昭和前期の俳人村上鬼城の句碑が建てられていた。「行く春や憎まれながら三百年」とある。温顔な義央公の木像を拝し、お墓の中で公はどのように思っているだろうか考えた。まさか三百年後の御自分が景気浮揚のために悪人となつてドラマや芝居に登場するなどとは想像もつかないことだろう。

歴史は夜作られるということを知ることがあるが、これは強者によって作られるのだと思う。

吉良町ほど文化財の残っている所は珍しいと大溪先生がおっしゃるが、それを証左する資料の残っていないのも珍しいということである。吉良家の後にこの領地を支配した殿様が殆ど処分したものと推定されているそう。善政を行った吉良さんのことも大半が伝説として残ったのだという。

伝説の赤馬の菓子を大量に買って宅配で送り、帰宅してから親戚縁者に「吉良さん」の話といっしょに配ったが、大半の人はキョトンとしている。わたしにとっては生涯最良とも言える程の旅であったのだが。―「芳文」一三九号(平成十一・八・二)より転載

鎌倉 花の寺吟行

斎藤 武

去る平成15年7月5日・6日の二日間 古文書研究会の研修旅行を上杉家の祖先憲方・氏定 関東管領 鎌倉市の墓所を中心に訪れた。会員のひとりとして参加した小生の駄句を紹介し、一笑に供したい。

水馬 八幡宮の路地裏に
長谷の寺 時鳥草枝垂れ蠟長けて
合歓の庵 爪先上がりの道遠く
片喰や 英雄墓の足元に
梅雨晴れに 四平の花稟と咲き
梅雨空に観音の頭 突き出して
憲方の奥津城に ひそと藪茗荷
夏衣 梔子の白夕暮れて
風知草 そよぐ百合子の奥津城に
浜昼顔 渚の歌碑に根じめたり
浜防風 少年の碑にそつと生き
木の下閣 槐の青や豊穰に
文字刷りの花一杯の 化粧坂
はらはらと 紫陽花寺に雨を呼び
羊草 蹲踞の水青く澄み
山門に 梅雨茸生えて極楽寺
鉢の木の昼に 凌霄の花群れて
夕闇に 浜木綿の花白く浮き
舞殿の朱に 大銀杏遙かにて
片白草 仄かに揺れて松が岡



海蔵寺にて

岩煙草 群生の崖 足重く
 山百合の枝垂れ 亀が谷の切り通し
 氏定の碑に 香を焚く薄暑かな
 英勝寺 體の字忘す草いされ
 美央柳 美姫の面影目前に
 十六碑 句碑難しく余花のあり
 酸漿草 英雄廟の足元を
 万緑に 長谷観音の露座の像
 睡蓮や 表参道遙かなり
 芋や 刈り跡のまだ新しく
 幕府跡 興亡の夢 若楓
 花仰木 鎌倉の海一望す
 石路や 歌碑の陰にも繁りゐて
 沙羅の花 精舎に鐘は響きゐて



伝 上杉憲方公の墓にて

切り通し 岩煙草の花群生し
 岩屋なる 此処氏定の霊前に
 丈余なる観音像に 腰を伸し
 会席と鎌倉和へに腹鼓 笑
 針槐 方丈の間の真向かひに
 牧傀や 稲村が崎公園を
 余花咲いて 季節外れの風を呼び
 駆け込みや男性禁止尼の寺
 東慶寺 風流女の悲哀秘め
 身分一切構い無く候 芥子の花
 日盛りに仰ぎて美しき 如来仏
 旅行けば駆け込み寺を偲ぶ 萩
 明月院の門より出でて人を待つ
 明月院石畳の参道遠くして
 弁天窟 千体地藏舞めきて
 底抜けの井に 道観の花ひとつ
 サーフインの 群れて走るや沖遠く
 古戦場 龍舌蘭が白く咲き
 校倉の国宝館に 一休み
 花思ひ地藏 蛍袋がこぼれさう

史跡めぐり

上杉景勝公・直江兼続公

生誕の地を訪ねて

米野 一雄

はじめに

春日山城の上杉景勝公は慶長三年（一五九八）正月、豊臣秀吉により会津百二十万石城主として栄転を命ぜられますがその三年後、徳川家康打倒を同盟していた石田三成連合軍が家康に敗れると、景勝公は直江兼続公の領地米沢三十万石へと大減封を申渡されます。あれから四百余年、私達は米沢温故会、米沢古文書研究会合同の研修旅行で、景勝公・兼続公生誕の地六日町・与板町を訪ねました。

この越後の地は阿賀野川・信濃川に囲まれた肥沃な穀倉地帯であり、加えて日本海に面した各漁港から水揚げされる海の幸にも恵まれ、内福な県民性と古代からの歴史遺産の豊富さは数えきれず、神社仏閣の壮大さは日本一といわれています。度々新潟の

地を訪れて感じることは、雄大な公共施設が次々に建てられてゆくことで、四方山に囲まれた盆地に住む私達には羨ましい限りでした。

日程

平成十八年 七月一日（土）

南魚沼市役所構内 景勝公・直江兼続公碑



管領塚史跡公園 法音寺 雲洞庵

同 七月二日（日）

県立歴史博物館 徳昌寺

◎南魚沼市役所構内

景勝公・兼続公碑

（南魚沼市六日町）

南魚沼市役所構内に「上杉景勝公・直江兼続公生誕の地」と銘打った立派な碑が立ち、全市を挙げて観光事業に取り組んでおられます。当日は休日にも拘わらず収入役さん・企画情報課課長さん・本日の案内を戴く大島要三さん・お三方のお出迎えを戴き、友好的な歓迎のお言葉、構内両公の碑建立に就いては米沢の関係者に大変お世話になったとのお挨拶に恐縮致しました。

◎管領塚史跡公園（南魚沼市六日町大字下原新田）

今から五百年程前、長尾為景（謙信の父）によって討たれた関東管領上杉顕定公戦死の地。はじめ弟の上杉房能が守護代長尾為景に討たれますと、兄顕定は直ちに上州平井城より関東軍八千余人を引き連れてこの地に進撃し為景軍を追います。為景は一



時越中迄退きますが、地方の豪族を味方にして再びこの地で戦い、遂に顕定公を討つ「下克上」の時代がありました。

昭和六十二年大島さん達有志は「史跡整備委員会」を作り募金活動を始め「私達が資金の半分を集めるから、町で半分負担して欲しい」と、この施設をつくり「追悼のこぼ」を捧げています。大島さんは当地の歴史研究家の第一人者で、毎年米沢を訪問されている有名な方で、私が十数年前に当地を訪問した時にもお世話になった方です。

◎法音寺（南魚沼市六日町藤原字境内）

当時は真言宗智山派で繁城山の山号を持つ寺である。長尾謙信の菩提寺は曹洞宗林泉寺で、幼年時代訓育を受けたのも林泉寺で、葬儀も曹洞宗大乘寺良

海が導師を勤めている。だが二代城主景勝は法音寺中興の祖「能海」とは昵懇の間柄で、景勝五十騎衆、福崎重房の後裔であったことから宗旨変えをしたとも考えられるのである。その後春日山・会津・米沢と絶えず景勝に隋従し、米沢城二の丸では「能化衆寺院」として破格の扱いを受けていた。その後「上杉家御廟所守寺院」となり寺領百二十石を賜っていた。今度の訪問団に米沢法音寺前任職高梨有興和尚様の奥様も同道されており、そのお陰で私達一同手厚いご接待を戴いた。



◎雲洞庵（南魚沼市 塩沢町雲洞）
藤原鎌足が蘇我氏を滅ぼし「大化の改新」を成功させたことにより、此の魚沼の地を荘園として与えられたので、此の地には藤原ゆかりの地名・神社・仏閣が存在し、その孫藤原房前公の母が此の地に僧庵を開いたのが、此の雲洞庵ですから創建は古く、



現在の寺院は江戸時代の再建で境内の広さは日本一と云われている。県指定の文化財で、「雲洞庵の土踏んだか」と云われる程、全国から修業僧が集まった寺であったという。

◎県立博物館（長岡市 関原町一）

新しい長岡市は昨年中之島町・越路町・三島町・山古志村・小国町を合併、また今年さらに和島村・寺泊町・栃尾市・与板町を合併して出来たばかりの新市である。広い野原に街路樹が植えられ、何処迄も続く四車線道路はまだまだ続く開発途上の息吹が感じられる。広い敷地に壮大な博物館を見た時、四方山に囲まれた盆地に住む私達にとっては羨ましい限りでした。

飾っているものは民族の歴史を語る数々・肥沃な大地に栄えた縄文文化の数々を紹介している堂々たる博物館でした。

◎徳昌寺（長岡市与板町）

徳昌寺は直江家三代の菩提寺であり、直江大和守が文明十一年（一四七九）本与板の地に耕陰和尚に開山させた曹洞宗寺院で、慶長三年（一五九八）兼続が米沢三十万石へと転封した時米沢信夫町へ移り、寺領百三十石を受けていた。

兼続が元和五年（一六一九）江戸鱗屋敷で病没し、夫人お船の方が寛永十四年（一六三五）江戸で病没

するとその十年後徳昌寺は米沢林泉寺との間で禄所争いを起こして破れ、廃院となったので宝暦年代再び与板の地に戻ったものである。



◎おわりに

謙信公・景勝公二代に亘って越後統一を果たし、越後全土の城主を配下に収めるが、元を糺せばこの城主達は、かつて藤原時代に幕府から派遣された「国司」であり、鎌倉時代に派遣された「地頭」達であり、土着して地方豪族となり各地に割拠する大名になったもので、上杉家の移封に伴い会津・米沢と移ってきているのである。

勿論武將の移動は当時の幕府の政策で「武士は一人残らず召従れ、農民一人たりとも召従れてはならない」と命令している。当時の米沢は人口六千七人・戸数八百三戸の小さな村落でしかなかったから、米沢は越後から移住した六千騎の武將とその家族四万人の後裔達によって形成されたといっても過言ではないのである。

研修旅行の思い出

佐藤 由美子

古文書研究会へ入ったのは、平成二年市史編纂室の嘱託職員になった時で、仕事の延長として研究会の準備やお茶出しなどをさせて頂きました。入会時の私は、古文書も日本史もさっぱり分からなかったもので、一から教えていただき今があると感謝しています。

前任の和田さんの退会により、幹事の職を仰せ付かってからは責任も重くなりましたが、楽しみも増えました。それが研修旅行です。最初は、幹事の植木さんの後ろをただついて行くだけでしたが、「旅のしおり」を手伝うようになり、目的地の資料を探したり、その土地の歴史にふれて、とても勉強になりました。

初めて参加した五浦に行く前には、上野の「大観記念館」を訪ね、横山大観の作品や人となり調べたり、多賀城へ行く前には、学生時代の友人と東北

歴史資料館のイベントに参加し、政庁跡や壺の碑などを見てきました。もちろん事前に行ける場合は少なく、ほとんどが旅行社さんと相談の上、行程を組むので失敗もありました。群馬県の白井城は、長尾氏ゆかりの城で、地図にも載っているので訪ねたのですが、蒭菟畑が広がるばかりで往時を偲ぶには少し：という事もありました。

また、平成五年に奥州を訪ねた時、下平先生に「えさし藤原の郷」が見たいと言われ、急遽出発を早め行くとその日がオープンで、「炎立つ」の俳優さんなどが参加してのセレモニーを見ることが出来、とても得をした気分になったのを覚えています。たまたま、平成十六年にも「えさし藤原の郷」を訪ねたところ、十一年目の開館記念日でタオルのプレゼントがありました。会の旅行は七月第一週の土日と決まっていますので、同じ日になるのも偶然ですし、その日にまた訪ねる事が出来たのも偶然で驚きました。今まで参加した旅行は、どこも歴史に則し勉強になるところばかりですが、中でも私が一番印象深いのは「吉良町」です。ちょうどNHKの「元祿騒乱」

が放映されている年で、同室の小野榮さんが資料提供（番組冒頭時代考証の先生方の後ろに名前を見つけたときは感激しました）をされた事もあり、私自身思い入れもかなり強く、旅行の計画以前より「元祿騒乱展」や江戸城松之廊下跡・吉良邸跡を主人と訪ねたり、また親しい友人と東京にある吉良上野介義央公・富子夫人のお墓を訪ねたりしました。

平成十一年、吉良町へは新幹線とバスを使い、現地では吉良公史跡保存会の大溪先生にご案内いただき、吉良家ゆかりの華藏寺・花岳寺・真正寺・金蓮寺・黄金堤などを回りました。華藏寺では吉良上野介義央公や義周公はじめ吉良家の方々の墓参をし、ご住職より吉良町では義央公を、親しみを込めて吉良さんと呼んでいる話や、忠臣蔵では描かれない領主としての姿をお聞きし、改めてその偉大さに驚きました。二日間という短い時間でしたが、上杉家・吉良家の歴史に触れ、とても充実した旅でした。

アルバムを開くと、懐かしい方々や笑顔あふれる写真がいっぱいあり、楽しかった旅行を思い出します。これまで、事故もなく続けられましたのも皆様

方のお陰と感謝すると共に、個人の旅行では味わえない貴重な経験や歴史の重みを感じるすばらしい旅行が、これからも続けられますようにと、会のご繁栄を祈ってやみません。

最近三か年の旅行に参加して

伊藤 なみ

平成十六年、角館・田沢湖へ

七月三日・四日、みちのくの小京都「角館」と田沢湖、藤原の郷を訪ねて平成十六年度初参加、緊張しました。

国道十三号を北上、新庄、湯沢、大曲経由、十二時三〇分、角館着。昼食、きりたんぼの食事です。秋田に来ましたという思いを心にした。このあとも夜の宴会、朝食と、きりたんぼで、秋田名物を心ゆくまで味わいました。

昼食後、角館武家屋敷、大村美術館、伝承館と見学、その後、田沢湖へ向かう。



えさし藤原の郷にて

水深の深い田沢湖。まず、辰子姫のブロンズ像です。伝説によると美しい辰子が巨大な龍に変身して湖の主になった。田沢湖周辺のホテル山麓荘に五時二十三分到着。夕食宴会の料理にきりたんぼもでる。

翌朝、八時半、

ホテル出発。盛岡手づくり村。ここでは民芸品のよなものを作られ、売られていた。

藤原の郷。再現された藤原時代と思えますが、観光のためのスポットとして開発されたようです。

予定にはなかった小岩井農場も見学しました。さまざまな家畜を飼育し、それを見せる農場と考えられる。

平成十七年、高野長英生誕二百年、水沢と平泉を訪ねて

七月二日・三日、一泊二日の旅。初日、胆沢城跡地、八幡宮境内に入り参詣した。

水沢三偉人記念館を見学する。高野長英（江戸時代の蘭学者）、後藤新平（医師、東京市長）、斎藤実（二二六事件の時に倒れた首相）である。三偉人の生家が水沢吉小路という町に集中しているため、見学も容易だった。



胆沢城入り口

殿美溪で休憩の時、雷雨。激しい降雨に会う。だんごを食べた。サハラガラスパーク見学。ガラス工芸品を見ました。宿泊地、矢びつ温泉に向かう。四時十六分着。

翌朝、ホテル出発八時二十五分。達谷窟毘沙門堂を嘆称。百年の歴史の岩面大仏、大磨崖仏。

義経堂、高館。義経の最期を遂げた歴史を見る。眼下の北上川、弁慶伝説の衣川を見て、昔を偲ぶ。

毛越寺庭園の広大さ、美しかったあやめ園の散策。藤原基衡・秀衡の建立した偉大な文化遺産に当時を偲びました。

讚衡蔵展。奥州藤原遺宝、国宝、重要文化財の展示を見る。

平泉仏教美術工芸は、初代藤原清衡が中尊寺、二代基衡が毛越寺、三代秀衡が無量光院と、平泉仏教都市を建設。

初代清衡によって上棟された金色堂。阿弥陀如来三尊、阿弥陀如来観音菩薩、勢至菩薩二天、持国天、增長天、六地藏（六体の地藏菩薩）、十一体の仏像群は現在も変わらない。諸仏配置され、美術工芸の文化として生き続ける金色堂仏像群は、極楽往生の為の供養仏像です。

須弥壇中央の金棺に清衡・基衡・秀衡と首だけの泰衡の遺体が安置され、仏像の供養体の下で藤原四

代が眠っている。基衡・秀衡と泰衡が清衡を中心に金色堂にまつられている。

紫檀、象牙、螺鈿、輸入材がふんだんに用いられた。螺鈿、鍔金、金具飾りの装飾に、独自の新しい構想による金色堂全体が、輝いている中で、極楽往生供養として生きています。

歴史は生き続けます。歴史は現代に生きています。

平成十八年 六日町・与板町を訪ねる

七月一・二日、米沢上杉由縁の地、新潟県へ。行きも帰りも降雨の送迎でした。

新潟県にはいるにつれ、荒川と滔々たる信濃川の増水し日本海へ流れ込む流れをバスの窓から眺めた。

塩沢町魚野の里で昼食地へ向かう。昼食後、目的地六日町役場で迎えられ、役場の方の挨拶を受けました。見学予定地コースを、六日町の歴史家大嶋要三先生が、同行、案内してくれました。

六日町立管領塚史跡公園、上杉顕定公供養塔、坂戸城跡、長尾政景公墓碑（参道工事中なり）、雲洞庵、法音寺と、今日の日程を終了。

古文書研の四十年

遠藤 綺一郎

宿泊先の湯沢温泉ホテルに到着、宴会、一泊。翌朝ホテル出発。与板の見学地をめぐり、昼食地の寺泊に到着。嬉しかった事は、寺泊港に船が停泊していたのが見えたこと。漁港でもある寺泊港は、佐渡の赤泊港へ二時間で行ける最短コースの航路であると聞く。寺泊は、良寛さんの由縁の地、出雲崎は良寛生誕の地。親しみ深い良寛さんが偲ばれます。



私どもの米沢古文書研究会は、今年の平成十八年に、発足四十周年の節目を迎えた。同好の人達の自発的な勉強会としてはよく続いたものと思う。そこで、これまで会を陰に陽に支えて下さった周囲の方々のご厚意、ご援助に感謝しつつ、会を創建し発展させてこられた先人の熱意と工夫の跡を振り返るとともに、現在の姿を記して、今後の歩みに繋げたいと思う。

設立の頃

米沢市には国の重要文化財（そして現在は国宝）に指定されている、中世、近世史料の「上杉家文書」や、主として米沢藩御記録所で記録された近世史料の「上杉文書」などを始め、多くの龐大かつ貴重な古文書が残されている。それらの主な収蔵先は、例えば「上杉家文書」は上杉家のお蔵（後、この文書は市に寄贈され、現在は市の上杉博物館が管理）であり、「上杉文書」は市立米沢図書館（現在は上杉博物館）である。これらの古文書は各地の県・市・町・村史の編纂資料として求められ、また研究調査のた

めの閲覧希望者も多く、対応する側にも、それらに
対する知識や解読力が必要になってくる。

このような実際必要を最も痛感していたのは、
当然ながら、当時の上杉家の家職の今泉亨吉先生と、
市立米沢図書館であった。

そこで今泉先生と、その退職校長仲間でご親友の
下平才次先生（郷土史の研究に打ち込んでおられた）
が中心になって、古文書解読の講座を開いていただ
くよう、図書館にお願いされた。阿吽の呼吸が合っ
たというか、図書館では早速了承された。

市立米沢図書館主催の「古文書解読講座」の第一
回が開催されたのは昭和三十七年で、会期は二日、
講師には福島大学の小林清治先生が当られた。その
時のテキストとしては、上杉家の御代々式目と、外
に仮名まじり文が選ばれたようである。（この解読
講座はその後、年一回へ二回の年も若干あった）ず
つ、中断なく開催され現在にいたっている。

米沢古文書研究会の誕生

「古文書解読講座」は毎回盛況で、講師小林先生の、
淑子さん、荘内銀行米沢支店長の度会さん、農協の
由井さんなどであり、初代会長には下平先生になっ
ていただいた。そして先生は講師も兼務されたので
ある。その後まもなく数年の間に、千喜良英二、
鈴木正道両先生（女子短大）、上杉虎雄、大狭猛の両
先生、上杉鉄砲隊長の山田武雄先生、渡部恵吉先生、
それに女子短大の遠藤綺一郎などが、加入して賑や
かになっていったが、発足当時は出席者七、八人の
ごく家庭的な集まりで、今泉、下平両先生のお人柄
のおかげで、なごやかな楽しい会となり、その雰囲気
は会のカラーとなって、ずっと続いた。

創立十周年

昭和五十一年（一九七六）、米沢古文書研究会は創
立十周年を迎えた。それにつき、記念事業として出
版を、それも当研究会にふさわしく、勉強のあとを
まとめたようなものを出版しようということで、前
年度の当初から準備委員会を設けて検討の結果、市
立米沢図書館蔵の、「百人一首抄」（「米沢善本」の一
つ）を影印により復刻し、それに解読を添えること

懇切で正確なご指導は、参加者の古文書への手応え
と学習意欲を強め、毎年受講する人が増えていった。
そのうち誰いうとなく、年一回の解読講座だけでは、
あいだがあまりにも開きすぎる、我々だけで月一回
集まって勉強会をやるうではないか、という声があ
がり、図書館長和田文益氏のおはからいで、昭和四
十一年（一九六六）七月、旧市立米沢図書館（お濠
端にあった）の二階で、第一回の会合が開かれた。



上杉家お蔵の前室（昭和44年頃）

ここに、いまに続く
米沢古文書研究会が
誕生したのである。
発起人は今泉亨吉、
下平才次の両先生を
始めとして、青木茂
長谷部善作、田中邦
彦の諸先生、それに
高橋素子さん、市立
米沢図書館の古山英
子さん、米沢女子短
大図書館司書の高橋

に決まった。まさに当研究会としてふさわしい企画
ではあった。というのは、会では昭和四十九年の
はじめ頃から、この書物の解読にとりかかり、昭和五
十年の当時もテキストとして月々勉強中のもので
あったのである。これは、藤原定家の撰した百人一
首の一首ごとに注釈を加えたもので、それにさらに、
後人が所々にびっしり細字で書き入れをしている。
その書き入れまでも含めて鋭意解読した。現在解読
が進行中のものの出版を決めるなど、いささか大胆
ではあったが、出版のことが決まって、勉強に拍車
がかかったのは言うまでもない。

実はもうひとつ励みのあるわけがあった。それは
かなり読み進んだ頃、中世歌壇史研究の第一人者井
上宗雄氏の一論文（「百人一首抄の序文について——実
暁記本と米沢本と——」武蔵野文学第二十集、昭四七・
一一）をたまたま目にしたことである。百人一首の
注釈書は定家の嫡流二条家系のものが古来主流で、
その系統の「応永抄」も「宗祇抄」も現在活字化さ
れている。ところが米沢本は内容がそれらと違う。
傍流冷泉家系の注と思われる、と氏は論じ、早急な

活字化ないし影印にして検討する価値がある、としている。我々の仕事はそれに応える形になった。

昭和五十一年九月、『米沢本 百人一首抄』として出版された。影印本は原本と同型、同寸とし、紙質もできるだけ原本に近いものを選び、印刷も上々。解読本は影印本と同型の別冊にして、ひとつ函に収めた。いささか凝って布張りの秩も若干部作った。七百部作って、一部二、三〇〇円（会員は二、〇〇〇円）で出したが、評判がよくてもなく売り切れになった。

そこで気を好くして、昭和五十三年六月に再版を五百部出したところ、もう飽和状態になっていたと見え、売れ行きがはかばかしくなく、十年たってもまた四十部も残っていた。ところが、よくしたもので、昭和六十三年十月二十二、二十三の両日、米沢女子短大の国語国文学科を世話役として、同短大を会場に、中古文学会秋季大会という学会が開かれ、全国から二百人ほど研究者が集まった折り、市立米沢図書館はこれに協賛して、二十三日、米沢善本を展示して見学に供したが、その際、一隅に『米沢本

百人一首抄』を積んで置いたところ、彼ら研究者の目にとまり、会に保存用のほかは、たちまち全部捌けてしまった。

上杉隆憲様のご入会

少しさかのほるが、昭和五十一年五月、下平才次会長が、米沢文化懇話会より、昭和五十年文化功労賞を受賞、会では五月二十二日、恒例の花見の宴を兼ねてその祝賀会を会津屋で催した。（こういう時でも、当時の例として、宴に先立って古文書解読の勉強がある程度やった）

昭和五十二年五月には、米沢古文書研究会が米沢文化懇話会より、多くの古文書の解読研究会や米沢善本「百人一首抄」の刊行などを認められ、昭和五十一年度文化懇話会賞を受賞する栄に輝いた。

この年、上杉家の御当主隆憲様が入会になられたことは、何といっても会のビッグニュースであった。隆憲様御夫妻は、米沢永住のおつもりで（と仄聞した）、旧伯爵邸の地続きに家をお建てになり（現・座の文化伝承館）、この年六月からお住まいで



上杉隆憲様をかこんで（昭60.1）

あった。会では当時上杉家所蔵であった戦国武將文書（現在、米沢市に寄贈され、国宝の指定をうけている「上杉家文書」のこと）を解読研究したい素志があった。そこで、会長が参上して、この文書を勉強のため、コピーして使用することをお願いしたところ、早速

とって感慨を催す出来事であった。

昭和五十三年五月、今泉亨吉先生が、米沢文化懇話会より昭和五十二年文化功労賞を受賞された。

会では五月二十七日、しん柳で、若干の勉強の後、祝賀会を催し、会長の祝辞の後、上杉様からもお言葉を頂いた。（なお、隆憲様は、奥様敏子夫人の健康上の理由もあって、昭和六十三年三月、夫人ともども米沢を去られ、東京都日野市に転居された。約一年弱、米沢にお住まいになられたことになる）

長井勢の活躍

昭和五十年代の前半の頃には、長井古文書研究会の芳賀勝助会長をはじめ、鈴木倉雄、蒲生正男、高石竜二といった錚々たる方々が相次いで会員となられ、勉強に大きな刺激を与えられた。長井古文書研究会の創立は昭和三十九年で、米沢より先輩である月に二回の例会を持つだけでなく、各例会の前には地区毎に集まって予習する日を設けている、という徹底した勉強ぶり。上記の方々は、会の講師や、地区勉強会の指導者の方々であった。

なおこのついでに、芳賀先生はじめ長井の方々の
お世話で、恒例のいも煮会が長井で開かれたことを、
記しておきたい。昭和五十五年十月十八日、萩苑で
開かれた。長井勢のお蔭で、和氣藹々の宴を共に楽
しみ、咲き残る萩を愛で、晴れた秋の午後を、皆々
大いに満足して過ごした。

その後、昭和六十三年五月、芳賀勝助編『近世古
文書辞典―米沢領―』が出版され、我々の必備の書
となったことも特筆しておきたい。米沢・置賜地方
の、夥しい近世文書に出てくる用例を、いちいち精
査し、その成果を踏まえて成った用語辞典で、長井
古文書研究会の総力を挙げた、長年の勤勉な営為の
所産であった。平成九年一月、一層の充実を備えた
増補改訂版が世に送られた。我々の学習する古文書
の確な理解のために、毎度この辞典から、どれだ
け恩恵を受け続けているか計り知れない。

現在は今挙げた方々は、あるいは亡くなられ、あ
るいはお見えにならなくなっているが、長井古文書
研究会からは、あとに続く方々が入会され、共に学
んで相啓発し合っている。

習会のテキストにするため、例の武将文書（上杉家
文書）のコピーをとっていると、その時たまたまお
蔵の中に居合わせた文化庁のお役人の目にとまり、
咎められたという。上杉家文書はその頃はまだ国宝
にはなっていないが、昭和五十四年、国指定の
重要文化財になっていた。直接コピー機にかけるな
ど、乱暴な扱いは以後まかりならぬ、ということに
なったのである。

昭和五十五年三月十日申し込み締切とした「テキ
スト頒布のおしらせ」という、会員に宛てた一枚の
ガリ版印刷のおしらせが残っているが、それによる
と、今後テキストとして使用する上杉家所蔵の古文
書は写真撮影を経て、その写真よりのコピーになる。
ついては割高になるが、希望者は申し込むように、
という趣旨で、武将文書は今後、毎月一回（B4版
百枚程度）ずつ計十回の予定で配付する。金額は一
回につき一万円。上杉家所蔵のその他の古文書は、
回数・枚数は未定だが、金額は約十萬円の予定（こ
れはテキストにはしないが、希望者を募る）という
ものであった。お蔵の波乱がこのような形で会に打

斎藤茂吉文化賞など

昭和五十三年十二月の例会より、学習の場が、従
来の旧図書館から置賜文化センターに移り、新しい
気分を味わった。現在も引き続き、この場所を使用
して、快適に学習会を続けさせていただいている。

昭和五十四年十一月三日、下平会長が、はえある
斎藤茂吉文化賞を受賞された。永年にわたり古文書
の解読を通して歴史的文献の体系的整備にあたられ
郷土文化の向上に寄与された功績によるものである。
会では、少々早手回しながら十月十三日、笹野観音
で、いも煮会を兼ねて、そのお祝いをした。この時
は境内に莫塵を敷いて、静かなたたずまいのなか、
和やかにお祝いの宴をした。

昭和五十五年六月三日、四日の両日、小国の梅花
皮荘に、初めての一泊研修旅行を実施した。途中、
所々の史蹟を見学して梅花皮荘に到着、雄大な飯豊
山が眼前に迫り、素晴らしい眺めであった。例に
よって勉強会の後、懇親会に親睦の一夜を過ごした。
波乱もあつた。ある日、上杉家の元家職今泉先生
が下平会長とお二人で、上杉家のお蔵に入って、学

ち寄せてきたわけである。武将文書はテキストだか
ら無しではすまされず、皆が買ったと思う。そのう
ち、マイクロフィルム化され、それをもとにしてコ
ピーされるようになったので、価格も従来どおり五
十枚で千円程度に落ち着き、現在に至っている。

下平会長急逝

このように、時代の推移とともに、対応を迫られ
る問題も無くはなかったけれども、下平会長の的確
な判断で会は適切な対応をすることが出来、月々の
勉強会のほか諸行事やときどきの企画も時宜を得て、
会は順調に進展した。会長が講師を務められる勉強
会も欠講は皆無で、会員は安心して会長に頼り、ご
健康についても、懸念していなかった。それだけに、
逝去の報は衝撃であった。

昭和五十七年四月二十一日早朝、胸部の圧迫感を
訴えられ、ご入院、手当の甲斐もなく午前七時三十
分、心筋梗塞のため、享年八十歳で急逝されたので
ある。まことに痛惜に堪えないことであつた。市で
は同日付けで、米沢市功績章を捧げた。

会では五月十五日、下平先生追悼会を催し、一同心からご生前のご恩に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げた。

そして今は亡き先生の、手塩にかけて育てて下さった米沢古文書研究会を引き継いでゆくために、新しく態勢を建て直すことになり、この日、故下平先生の講師の後任として、長谷部善作先生と高橋素子氏が決まり、新講師による勉強会を済ました後、次のような運営上の役員を決めた。

会長 今泉 亨吉
副会長 長谷部善作 高橋 素子
理事 上杉 虎雄 遠藤綺一郎
小野 栄 千喜良英二
芳賀 勝助
監事 岩槻 代寿
幹事 植木 伸子

理事、監事、幹事という役名が現れるのは、この時が最初である。

またこの日、あらたに初級コースが設けられ、その講師には高橋素子氏になった。初級コースは比較するまでになった。そこで、この度は、記念行事として、祝賀会と記念出版とを行うこととし、準備を進めた。

祝賀会は、十月十八日(土)午後一時、ホテルサントリーで開催された。祝宴に先立ち、福島大学教授小林清治先生が、「上杉景勝と伊達政宗」と題する講演をして下さり、祝賀会に一段と光彩をそえられた。

記念出版には、上杉謙信公が、継嗣景勝公(幼名喜平次)の手習いの手本用に、みずから書いて与えられた三つの本を復刻することにした。「伊呂波尽」・「消息手本」・「名字尽」の三書がそれである。いずれも折本仕立てで、見たところ大きさも体裁もお経の本そっくりである。

「伊呂波尽」(いろはづくし)は、「い、ろ、は…」四十七音のそれぞれを表すのに使われる漢字の草書体(いわゆる変体仮名、それぞれに複数字ある)を音ごとに並べて墨書し、一字ごとにその音訓を朱書きで注して漢字の発音や意味まで解るよう、配慮してある。「いろは…」の手習いのため、喜平次の五歳



初代下平、二代今泉会長をかこんで(昭47.5)

的初心者向けの勉強会の必要が感ぜられて設けたもので、テキストも独自のものを選び、勉強会の日も上級(第三土曜日)の一週間後に設定された。

以上の再整備によつて、会は立ち直ることが出来た。

創立二十周年の頃

昭和六十年五月、今泉会長が、米沢文化懇話会より、昭和五十九年度文化懇話会賞を受賞された。さらに、同会より昭和五十二年文化功労賞を受賞されており、重ねての受賞である。

さて、昭和六十一年(一九八六)は、会の創立二十周年にあたる。創立当時は七、八人の同好の士が集まって勉強していた会も、いまは八十数名を擁す

十歳ころ与えられたものらしい。

「消息手本」は消息(手紙)によく用いられる決まり文句を並べて墨書した手本。奥に「永禄十一年十月吉日 輝虎」とあり、喜平次十四歳の時と解る。

「名字尽」(みょうじづくし)は、謙信公の配下の将士八十一名の名を墨書されたもので、動員名簿の性格も備えていた。奥に「天正五年…」云々の日付があつて、景勝二十三歳の時と知られる。

謙信公の書は、青蓮院流の正統を伝える近衛植家に学んだという品格のあるもので、三書ともきわめて丁寧な墨書されており、それぞれを与えられた時期といい、継嗣景勝に対する愛情と教育的配慮がうかがわれるものである。

ところで、これ等の三書を、影印復刻して刊行するには、避けて通れない問題があつた。三書とも上杉家に代々大切に秘蔵されて、現在まで伝えられてきている貴重書であるから、まず、上杉家のお許しを得なければならぬ。そこで、上杉家の元家職であられた今泉会長が、上杉家ご当主隆憲様に折り入つてお願い申し上げたところ、ご快諾を頂いたの

である。

影印の印刷はたいそう綺麗に仕上がりに、表紙の模様・色彩の感じも上手に複製された。三書をセットにして、布張りの秩に収め、別冊の解説書（解説を含む）を添えた。二百部作り、一部六千円と、少々高価であったが、上杉家の貴重書の複製ということに評判を呼んだのか、全部捌けた。飽かず眺めたい書であり、古文書の文字を覚えるのに絶好の手本でもあった。漢字に付けられた訓（読み方）の注などから、国語学の資料としての評価も大きいとされた。

上杉虎雄氏第三代会長に

これまで会運営のかなめとして、力を尽くしてこられた今泉亨吉会長、長谷部善作副会長はご高齢と健康上の理由等から退かれることになり、昭和六十二年二月の理事会で、第三代会長候補として、上杉虎雄氏が推挙された。また、この理事会では、会則（案）が作成された。会則が明文の形で示されたのはこの時が初めてである。

同年四月十八日開かれた総会で、上杉第三代会長

究協議会副会長などを歴任、郷土史の解明を通じて地域文化の振興に貢献された功績によるものである。当研究会としても、まことに喜びに堪えない慶事であった。

上杉会長の時代

上杉会長の時代は、就任早々定められた会則が、少しも変更を加えられずに推移したことにも示されるように、一言で言えば、会長のもとに、安定した、滑らかな運営がなされた時代であったといえよう。その中で会員は、おのおの安心して古文書の勉強に励み、諸行事を楽しむことが出来た。

けれども、安定した時代であったとはいえず、この時代は、振り返ってみれば、十六年の長きにわたったのであるから、それなりに、悲喜さまざまな出来事や変化があった。以下にそれらを、かいつまんで記す。

平成三年五月、I部およびII部の講師高橋素子氏ご病気のため、会員齋藤武氏が代わってII部の講師を引き受けられた。

が誕生し、新会長のもとで、会則が決定された。即日実施になり、会則に基づいて新しい役員が決まった。すなわち副会長二名（千喜良英二氏・遠藤綺一郎）、監事二名が決まり、そして、あらたに理事と幹事が会長より委嘱された。今泉前会長と長谷部前副会長は、いずれも顧問となられた。（付録の「顧問・役員一覧」参照）この会則は、この時制定されたままの姿で、現在迄受け継がれている。

また、これまで上級コースの講師を務めてこられたお二人のうち、長谷部先生は、この時をもって講師を退かれ、替わって林泉寺ご住職の菊池伸之氏（前・市立米沢図書館長）に、講師になっていただいた。初級コースの講師は、引き続き高橋素子氏が務められた。なお、この年五月、それまでの上級・初級をI部・II部と改め、会計や名簿を一本化した。

この年十一月三日、今泉亨吉前会長が、齋藤茂吉文化賞受賞の榮に浴された。郷土史研究家として地元に残る上杉家の古文書の解説に努め、また、置賜史談会の会長として置賜地域史の発掘に尽力、さらに米沢市史編纂委員、県史編纂会議員、県地域史研

平成四年五月一日、前副会長長谷部善作先生が逝去された。享年八十七歳であられた。

そして平成五年六月二十四日、前会長今泉亨吉先生が逝去された。享年九十一歳であられた。六月二十七日、林泉寺での葬儀には、上杉虎雄会長が葬儀委員長を務められた。

さきには下平会長を失い、今また、会の育成に尽瘁された両先生を相次いで失った。淋しいことであつた。会員一同、お二方に心から感謝と哀悼の念を捧げた。

平成六年一月からI部の講師に青木昭博氏が加わり、I部の購読の二本立てが復活、充実を増した。現在も引き続き、二本立てで行われている。

平成八年は会の創立三十周年にあたり、記念行事を計画した。これについては、後に別の項をたてて記すことにする。

市立米沢図書館主催の「古文書解説講座」は引き続き毎年一回七月中の二日間、きちんと開催され本会会員をはじめ、受講生に親しまれていたが、平成十年の第四十二回「講座」を最後に、小林清治先生

は講師をお辞めになった。先生は講座の創設以来、この時まで四十年間、ずっと講師を務められ、長い間先生のご指導を受けてきた多くの人達に、名残を惜しまれながら、退任された。実は、先生は平成二年、福島大学を定年で退職されたのを機に、講師辞任を申し出られたのであるが、主催者・受講生の熱望もだしがたく、それではと、二日間のうち一日だけ担当ということで引き受けられた。もう一日の分は別の方にお願ひし、年々その形でこの年に及んだのである。もう一日分の講師は平成二年から同九年までは渡部史夫先生（県教育センター）、平成十年は菊池慶子先生（聖和学園短大）であった。ついでながら記すと、「古文書解説講座」は平成十一年からは、年々菊池慶子先生と伊藤清郎先生（山形大学）のお二人が一日ずつ講師を分担され、平成十八年（本年）には第五十回が開催された。

次に上杉博物館の委託のことに触れておきたい。平成五年から同十二年にかけて、会が上杉博物館の委託を受けて、断続的に何度か、かなり多量に、博物館蔵の古文書資料の解説を引き受け、会では数人

が選ばれて解説作業に従った。これは内輪の勉強会とは性質が違い、責任をもって当たらなければならぬので、任にあたった者は皆、それまでの勉強の成果を生かすべく、懸命に取り組んだ。

平成十一年三月（平成十年度末）、長年講師を務めてこられた菊池伸之先生（林泉寺ご住職）が講師を辞任された。先ごろ脳内出血を患われて、それは辛い治癒されたが、斯界に重きを加えられて、宗務多忙になられたためである。後任の講師は、新年度から会員下平忠正氏が引き受けられた。

米沢古文書研究会は、従来、米沢文化懇話会の団体会員であったが、



第三代会長 上杉虎雄氏

米沢文化懇話会が衣替えして、米沢市芸術文化協会となり、再出発することが決まったことを受けて、平成十一年四月の総会において、会はその協会の会員となる

ことを見合わせると決めた。

上杉会長の時代の出来事については、まだ記すべきことが幾つかあるが、しばらく置いて後に回し、少し年代はさかのぼるが、ここで会の創立三十周年記念事業について記す。

創立三十周年

さきに記したように、平成八年（一九九六）は会の創立三十周年にあたるので、二十周年の例にならって、祝賀会と記念出版とを計画した。

祝賀会は十月二十六日（土）午後一時からホテルサンルートで開催された。この時も小林清治先生にお願いして、記念講演をしていただいた。演題は「伊達氏と米沢」で、前回の二十周年の時もそうであったが、多くの古文書を拠り所として引かれながら、精緻なお話を展開された。

記念出版のほうは、米沢藩士泉崎賢親（号、真畔）著「飯豊の山ふみ」を復刻し、解説・解説本を添え、セットにして一つのブックケースに収めた。これは飯豊山登山の紀行文で、著者が友人と三人で、天保

九年七月二十二日門出し、四日三晩かけて帰着するまでの一部始終を書き綴ったもの。実地踏破の詳しい体験記であるが、著者は右筆であっただけ、文字も文章も見事で、また歌人としても聞こえ、随所に自作の歌（漢詩も）を挿んで興趣を添えている。さらにこの書には、途中で目撃した風景の画が数多く入っていて楽しい。これは同行した友人の一人佐藤秀臣の筆で、この人も藩士であるが画に巧みで、「米沢文晁」と言われたとか。



講演をされる小林清治先生

「飯豊の山ふみ」の原本は、文も画も、勿論それぞれ筆者の肉筆で、二つとないもの。泉崎家が代々伝えてきたが、市井に流出、行方不明になっていたので、米沢市が見つけて購入した話題の本

で、それを市にお願いして初めて復刻した。

会では早いころ勉強し、後にⅡ部でも取り上げた懐かしいテキストである。五百部作って、一部六五〇〇円で頒布したところ、会員の思い入れ程には伸びず、残部がかなり出たのは残念であった。

有為会表彰など

平成十二年六月二十四日、米沢古文書研究会が、社団法人米沢有為会より表彰を受けた。会長が代表して出席し、表彰状を頂戴した。文面は左の通りである。

表彰状

米沢古文書研究会殿

あなたは多年にわたり 米沢に伝わる武将文書や藩政文書並びに紀行文書などの解説に努め 新しい歴史の発掘や情報提供に多大な貢献を果たされました 特に市立米沢図書館や米沢市立上杉博物館所蔵の古文書の解説に尽力し 教育文化の向上に寄与された功績はまことに顕著であります

例会にも欠席され、淋しい晩年であった。

平成十四年十一月、下平忠正氏は体調を崩して講師を辞され、遠藤綺一郎が講師を務めることとなった。

上杉会長辞任

上杉虎雄会長は、あまり長くなるからと、かねて辞意を漏らしておられたが、ついに、平成十五年四月の総会において、辞任された。在任満十六年にわたる多大の貢献に対して、会より感謝状を贈呈して微意を表した。後任として、遠藤綺一郎副会長が第四代会長に、下平忠正氏ならびに佐藤美保子氏が副会長となり、理事、監事、幹事も選任された。

上杉会長は長期間、常に安定感のある運営をされ、会員相互の親睦を心がけて、学力の向上と、会にふさわしい社会貢献を期された。特に毎年の研修旅行には、上杉家ゆかりの地を選んで、古文書で学んだ世界を実地に確かめながら親睦を深めるという、みのりあるやり方をされた。さきに記した有為会の表彰は、社会に認められた成果として、会員一人一人

よってここに記念品を贈り表彰します

平成十二年六月二十四日

社団法人米沢有為会

会長 本間敏雄

同年十一月三日、上杉虎雄会長が米沢市功労者表彰を受けた。多年にわたり教育文化に寄与された功績によるものである。会長はまた、永年にわたり図書館事業振興に貢献された功績により、この年六月二十八日に、全国公共図書館協議会会長表彰を受けていたが、この二つの表彰を兼ねた祝賀会が十二月五日、東京第一ホテル米沢において盛大に開催された。この時は、米沢古文書研究会と市立米沢図書館が中心となり、上杉文化振興財団をはじめ多くの関係団体が加わって発起人会を作り、準備・実施にあたった。

平成十二年は、以上のように慶事が続いた。

ところが、平成十四年六月十九日、元副会長の高橋素子氏が亡くなられた。享年七十九歳（満七十七歳）、夫君（元市立病院院長）に先立たれ、病気がちでにとってももとより、特に会の代表である上杉会長にとつて、心ゆくものがあつたであろう。

いろは塾の開設

昭和五十七年に初級コース（昭和六十二年からはⅡ部と改称）が設けられてより、これまでⅠ部・Ⅱ部の二部制でやっていたわけであるが、はじめは初級コースということでスタートしたⅡ部も、会員の腕が上がってきていて、初心者にとつて、いきなりははいりにくい、という声を聞くようになった。しかし、新しい人に会員になつてもらわなければ、会の発展は望めない。平成十五年度のはじめ（四月）、あらたに初心者入門講座開設の話題が出て、だんだん案を練り、次のような要項で、「いろは塾」なる初心者入門講座を開くことにした。すなわち、

講座は本年の九月、十月、十一月の三回とする。
日時はⅡ部の日の前段をあてる。
会費は五百円、古文書の解説の第一歩から学習する。

以上のような計画で、「広報よねざわ」で募集した

ところ、十人ほど応募者があり、予定に従って開講した。講師は、Ⅱ部の講師齋藤武氏に兼任していたが、「御代々式目」などを勉強した。この講座ではサポーター制というのを編み出し、好評を得た。Ⅰ部の会員がボランティアで志願してサポーターとなり、受講者一人一人の傍らに席をとって、講義の区切りごとに受講者から質問を受けたりして、学習の徹底をはかったのである。

講座は継続の希望によって、年度の終わりまで継続された。新年度の四月からは、サポーターの習慣は続いているものの、Ⅱ部の学習を一緒にやっている。そのようにして五人ほどが会員となり、中にはⅠ部にも参加している人も居て、現在に至っている。いろいろは塾は折りを見てまた試みたいものである。

近年のこと

平成十五年十一月十五日、前副会長千喜良英二氏が逝去された。享年七十七歳であった。和算の造詣が深く、斯界にその人ありと知られていた。和算研究の必要上、早くから当研究会で、古文書の勉強に

励まれた。はじめは、すぐ退院出来る見込みで入院されたが、意外に長引き、ついに逝去された。残念の至りであった。

平成十七年五月、齋藤武氏が、ご都合でⅡ部講師を退かれた。会員山王堂初雄氏が後任の講師となり、現在にいたっている。

平成十八年四月、副会長の一人下平忠正氏が、健康上の理由で副会長を辞任された。会員一同、切にご回復を祈っている。なお残任期間（平成十八年度中）は後任を置かず欠員のままとすることになった。

年中行事のことも

最後に恒例になっている年中行事に触れる。

まず、例会の学習会は、Ⅰ部が毎月第三土曜日、Ⅱ部が第四土曜日。いずれも置賜文化センターで、午後一時半から四時ごろまで。テキストは、長年「上杉武将文書」（「上杉家文書」）を中軸に、付録の「一覽」にあるように、さまざまなものを取り上げて勉強してきた。

次に、例会の学習会以外の行事を月順に列挙する



クリスマスパーティー（平10.12）

と、四月は、総会と花見の宴。七月は一泊の研修旅行（「一覽」参照）。またこのころ開催される二日間の図書館主催「古文書解説講座」への積極的参加。十月は、秋の宴。宴に先立ち、会員による一時間ほどの「ミニ講演会」（「一覽」参照）が行われる習わしである。十二月には、「クリスマス会」でフランス料理など、なにかご馳走を食べる。明けて、一月には、新春茶話会。このように、勉強と楽しい諸行事とを織り交ぜて、親睦をはかっている。

さて、本年、平成十八年（二〇〇六）は米沢古文書研究会発足四十周年にあたり、祝賀の会を開催して、会



新春茶話会（平8.1）

員・元会員一同、これまでお世話になってきた関係各位のご厚情に感謝しつつ自祝し、今後のさらなる存続発展を祈った。なお、会員・元会員の手作りの記念雑誌を出すことにして、よりより準備にかかり、鋭意制作にあたったが、ここに完成を見て、皆様にお届け出来ることを、編集委員一同まことに幸せに思います。

初級コース	
✓ 平家物語	昭和57年5月～昭和57年12月
✓ 南亭余韻	昭和57年5月～昭和60年6月
源氏物語	昭和58年1月～昭和58年12月
松陰日記	昭和59年1月～昭和60年8月
蛇変化夢物語	昭和60年8月～昭和61年9月
伊勢物語	昭和60年9月～昭和61年6月
野ざらし紀行	昭和61年8月～昭和61年12月
小野川温泉由来記	昭和61年10月～昭和61年11月
Ⅱ部	
土佐日記	昭和62年2月～昭和62年8月
✓ 小千谷行日記	昭和62年2月～昭和63年3月
漂客談奇	昭和62年9月～平成元年1月
✓ 飯豊の山ふみ	昭和63年4月～平成元年10月
奥のほそみち	平成元年2月～平成2年7月
漂流記	平成元年11月～平成3年4月
枕草子	平成2年9月～平成6年4月
悪狐三国伝	平成3年5月～平成5年2月
今はむかし	平成5年3月～平成5年7月
続悪狐伝	平成5年9月～平成6年7月
✓ 松島日記	平成6年5月～平成7年12月
こしかた日記	平成6年9月～平成8年5月
百枝折	平成8年1月～平成10年3月
旅のすさび	平成8年6月～平成10年12月
駿府御加番所勤方手扣日記	平成10年4月～平成10年12月
松井報讐記	平成11年1月～平成15年2月
筆のまにまに	平成11年1月～平成13年7月
猪苗代組記録	平成13年9月～平成16年6月
✓ 前田慶次道中日記	平成15年3月～平成15年6月
御代々式目 ()	平成15年9月～平成16年3月
百人一首から	平成16年4月～平成16年12月
✓ 親子咄	平成16年9月～平成17年12月
好古堂随筆	平成17年4月～平成18年9月
✓ 笹野観音通夜物語	平成18年2月～現在
農官江御論之御書	平成18年10月～現在

かんたん和
 ✓ 飯粒集
 ✓ 管見談(巻人)

勉強した古文書一覧

Ⅰ部	
✓ 笹野観音通夜物語	
✓ 小千谷行日記	
✓ 飯豊のやまぶみ	
鉄砲一卷之事	昭和47年9月～昭和50年7月
寛政の執行帳	昭和50年11月～昭和51年3月
✓ 百人一首抄	昭和49年 月～昭和51年3月
田沢之日記	
せめては草	昭和51年4月～昭和52年2月
漂客談奇	昭和52年2月～昭和53年3月
上杉家武将文書	昭和52年6月～ 昭和57年5月～ 昭和62年5月～ 平成11年5月～ 平成16年11月～現在
✓ 井蛙鄙談	昭和53年4月～昭和55年4月
大瀬口御番所要簿	昭和55年5月～昭和58年1月
✓ 南亭余韻	昭和57年5月～昭和58年1月
漂民御覧之記	昭和58年2月～昭和59年1月
怪譚雨夜の伽	昭和59年2月～昭和59年11月
小笠原流婚礼祝儀伝授書	昭和59年12月～昭和60年8月
酌之次第	昭和60年9月～昭和61年11月
江戸勤心得大略	昭和61年12月～昭和62年6月
明和御教示覚書	昭和62年7月～昭和63年6月
✓ 組外公務雑記	昭和63年7月～平成5年12月
判所改所御令條書	平成6年1月～平成8年9月
竹俣文書	平成7年5月～平成7年12月
削封日記	平成8年11月～平成11年9月
明先日記	平成11年11月～平成14年2月
大石家文書	平成14年3月～現在
七家訴状	平成15年1月～平成16年9月

細勝文書
 細島日記

毎月の例会



長谷部善作先生



菊池伸之先生



斎藤武先生

講師一覧

下平 才次 (昭和41.7~昭和57.4)	[初級コース]
[上級コース]	高橋 素子 (昭和57.5~62.3)
長谷部善作 (昭和57.5~昭和62.3)	
高橋 素子 (昭和57.5~昭和62.3)	
[I部]	[II部]
菊池 伸之 (昭和62.4~平成11.3)	高橋 素子 (昭和62.4~平成3.4)
高橋 素子 (昭和62.4~平成4.3)	斎藤 武 (平成3.5~平成17.4)
下平 忠正 (平成11.4~平成14.9)	山王堂初雄 (平成17.5~H22.3)
青木 昭博 (平成6.1~)	山岸久悦 (H22.4~H22.11)
遠藤綺一郎 (平成14.11~) H22.1	米野一雄 (H22.12~H23.6)
山王堂初雄 (H22.2~)	高橋素子 (H23.1~H26.4)

岩槻代子 (H23.7~) → 川崎裕子 (H26.3~)
 平賀陽子 (H23.10~) 園崎裕子 (H26.5~)
 高橋素子 (H23.9~)

三二講演会一覧

第1回	昭和62年	菊池伸之図書館長のお話	
第2回	昭和63年	講話	
第3回	平成元年	斎藤公と19人の子ども	上杉 虎雄
第4回	平成2年	明治人の洋行 大橋乙羽	遠藤綺一郎
第5回	平成3年	御廟勤務雑感	上杉 虎雄
第6回	平成4年	暦あれこれ	千喜良英二
第7回	平成5年	漢字の歴史	芳賀 勝助
第8回	平成6年	雑談 綱憲公	上杉 虎雄
第9回	平成7年	陰陽五行説雑考	高橋 豊
第10回	平成9年	上長井の郷土史を編集して	下平 忠正
第11回	平成10年	記録による赤穂事件の真相	上杉 虎雄
第12回	平成11年	吾妻健三郎とその家族	遠藤綺一郎
第13回	平成12年	「和算」について	千喜良英二
第14回	平成13年	このごろおもうこと	下平 忠正
第15回	平成14年	米陽八景について	斎藤 武
第16回	平成15年	色部総督の最後	米野 一雄
第17回	平成16年	妙観院宛景勝書状について	下平 忠正
第18回	平成17年	茶湯こぼれ話	佐藤美保子

18
19
20
21
22
23
24 本村喜雄 義民が駆ける
25 宮田直樹 坂野輝夫
26 岩槻代子
 本庄宗 山岸久悦
 滝信合巻 106 - 山王堂初雄
 理蔵金伝説 山岸久悦
 上泉伊成 上見一雄

研修旅行一覽

日付	人数		目的地	主な見学・観光地	宿泊地
	男	女			
4・7・11	3	12	足利・日光	銅山跡、日光東照宮	湯野浜温泉 シーサイドホテルいさごや
5・7・11	4	11	五浦海岸	いわき市石炭化石館、勿来の関跡、大観記念館、北茨城市歴史民俗資料館、野口雨情生家、白水阿弥陀堂、あぶくま洞	五浦温泉
6・7・11	5	10	芭蕉園	春日山神社・林泉寺、弥彦神社	弥彦温泉
7・7・11	4	9	会津若松	春日山神社、林泉寺、弥彦神社	丸峰観光ホテル
8・7・11	7	10	奥の細道	野口英世記念館、会津民俗館、天鏡閣、会津武家屋敷、藩校日新館、大内宿、喜多方プラザ、会津漆美術博物館	湯の浜温泉 シーサイドホテルいさごや
9・7・11	6	10	小千谷	善宝寺、象潟蚶満寺、十六羅漢岩	芦ノ牧温泉
10・7・11	6	10	角館・盛岡	柳津円蔵寺(虚空蔵)、田子倉ダム、奥只見ダム、朝日山戊辰戦跡、慈眼寺、弥彦神社、北方文化博物館	おのおゆ温泉
11・7・11	12	0	佐渡	角館武家屋敷、田沢湖、小岩井農場、石川啄木記念館	ホテルニュー湯元
12・7・11	5	15	気仙沼大島	無名異焼、佐渡金山、尖閣湾観光、真野御陵、根本寺	七浦海岸
13・7・11	4	11	粟島	狛鼻溪舟下り、補蛇寺六角堂、宝鏡寺	丸栄
14・7・11	7	4	飯豊	粟島、観音寺	気仙沼大島民宿
15・7・11	1	11	飯豊大日杉	「飯豊の山ぶみ」をたどる旅	源左エ門
16・7・11	7	8	飯豊大日杉	白川ダム、宇津峠、片洞門、小国(一宮子易神社)、御役場跡、飯綱神社、県社山、赤芝峡、玉川口	なし(日帰り)

17・7・11	8	8	角館・田沢湖	高野長英記念館、胆沢城跡、中尊寺、毛越寺、義経堂	矢びつ温泉 瑞泉閣
18・7・11	9	16	鎌倉	鶴岡八幡宮、高德院、明月院、東慶寺、海蔵時、英勝寺	鎌倉パークホテル
19・7・11	4	8	水沢・平泉	高野長英記念館、胆沢城跡、中尊寺、毛越寺、義経堂	田沢湖高原温泉
20・7・11	6	6	郡山	安積歴史博物館、開成山大神宮、開成館、立岩秋香舎、野口英世記念館、十六橋制水門、天鏡閣、会津村、桐の博物館	ブラザホテル山麓荘
21・7・11	10	6	吉良町	華蔵寺、花岳寺、黄金堤、真正寺、金蓮寺、豊川稲荷	戸倉上山田温泉
22・7・11	6	6	諏訪	諏訪大社上社、高島城、サンリツ服部美術館、温泉寺、霧ヶ峰、白樺湖、蓼科	ホテル圓山荘
23・7・11	10	6	群馬県吉井町	高崎白衣観音、吉井町郷土資料館、多胡碑記念館、白井城跡、空恵寺	吉井駅前
24・7・11	9	7	水戸	西山荘、弘道館、偕楽園、徳川博物館、県立歴史館、笠間稲荷、益子	鍋川ホテル
25・7・11	5	5	多賀城・白石	東北歴史資料館、青葉城資料展示館、赤門美術館、白石城、信夫文知摺観音	戸倉上山田温泉
26・7・11	9	10	粟島	粟島(板碑)、村上市郷土資料館、若林家住宅	ホテル向滝
27・7・11	5	7	庄内	いでは文化資料館、致道館、致道博物館、善宝寺、土門拳記念館、本間美術館、山居倉庫	磐梯熱海温泉
28・7・11	12	12	奥州	宮沢賢治記念館、高村光太郎記念館、毛越寺、中尊寺、飯美溪、えさし藤原の郷	吉良温泉観光ホテル
29・7・11	5	10	栗島	粟島(板碑)、村上市郷土資料館、若林家住宅	きらかん
30・7・11	8	8	奥州	志戸平温泉	RAKO華之井
31・7・11	8	8	奥州	志戸平温泉	RAKO華之井

会員数の推移

年度	男(人)	女(人)	計(人)	
昭和41				
42				
43				
44				
45			23	
46			29	
47			28	
48	23	8	31	
49	26	7	33	
50	28	7	35	
51	25	7	32	
52	27	9	36	
53	31	8	39	
54	30	11	41	
55			44	
56			42	
57	30	9	39	(初級開設) 初級35
58			42	39
59	34	7	41	51
60	26	9	35	48
61			35	55
62	35	44	79	62年度以降はI部、II部(旧称「初級」)の計。
63	40	37	77	
平成1	39	34	73	
2			60	
3	30	28	58	
4			51	
5	23	27	50	
6	25	24	49	
7	24	23	47	
8	26	22	48	
9	24	20	44	
10	25	13	38	
11	25	12	37	
12	23	10	33	
13	22	10	32	
14	23	9	32	
15	21	9	30	
16	21	10	31	
17	19	10	29	
18	20	11	31	

顧問・役員一覧

年度	顧問	会長	副会長	理事	監事	幹事	備考
昭和41							
42							
43							
44							
45							
46							
47							
48							
49							
50							
51							
52							
53							
54							
55							
56							
57							
58							
59							
60							
61							
62							
63							
平成1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							
16							
17							
18							

平成18年度米沢古文書研究会事業

I 部		II 部	
4/15	総会・花見	4/22	例会
5/20	例会	5/27	例会
6/17	例会	6/24	例会
7/1・2 研修旅行「六日町・与板町を訪ねる」			
7/15	例会	7/22	例会
8月 夏休み			
9/2・9 図書館主催 古文書解説講座			
9/16	例会	9/30	例会
10/21	40周年記念 講演会・祝賀会	10/28	例会
11/18	例会	11/25	例会
12/16	例会	12/9	例会・クリスマス会
1/20	例会	1/27	例会・新春茶話会
2/17	例会(理事会)	2/24	例会
3/17	例会	3/24	例会(監査)

米沢古文書研究会 会員名簿

平成18年度現在

	名 前	住 所		名 前	住 所
顧問	上杉 虎雄	米沢市		齊藤 寛喜	米沢市
会長	遠藤綺一郎 x	米沢市		o 佐藤 與七	長井市
副会長	o 佐藤美保子	米沢市	理事	o 山王堂初雄	米沢市
	五十嵐幸一	米沢市		下平 忠正 x	米沢市
	伊藤 なみ	米沢市		鈴木健太郎	南陽市
理事	o 岩槻 代寿	米沢市		角屋由美子	米沢市
	梅津 幸保	米沢市		高垣 順子	米沢市
	o 遠藤 吉蔵	高島町		高橋 昭夫	長井市
	小野 榮	米沢市		中川 正昭	米沢市
	金岡 正義	米沢市		o 仁科 春七	長井市
監事	o 川口 雅子	米沢市		本間 とみ	小国町
	木村 喜雄	米沢市	監事	o 山岸 久悦	米沢市
	後藤 律子	米沢市	理事	o 米野 一雄	米沢市
	近野 均	米沢市	幹事	o 植木 伸子	米沢市
	齋藤 佳子	南陽市	幹事	o 佐藤由美子	米沢市
理事	斎藤 武 v	米沢市			

年会費の推移

時 期	金 額 (円)	備 考
昭45~	500	
昭50~	700	
昭51~	1,000	
昭53~	1,500	
昭57~	2,000	初級コース 2,000 昭57.5より初級コースを設ける。
昭60~	2,500	2,000
昭62~	2,000	昭和62年度より会計を一本化し、 I部、II部とし、どちらに(あ るいは両方に)出てもよいこと にする。
平4~	3,000	

米沢古文書研究会 会則

第一条 本会は米沢古文書研究会と称する。

第二条 本会の事務所を市立米沢図書館内に置く。

第三条 本会は古文書の解読技術を身につけ、郷土に伝わる古文書に親しみ、相互に学習・研究していくことを目的とする。

第四条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1、古文書解読学習会の開催。
- 2、その他、必要な事項。

第五条 本会は、本会の趣旨に賛同する者をもって組織する。

第六条 本会に次の役員をおく。

- 会長 一名 幹事 若干名
- 副会長 二名 監事 二名
- 理事 若干名

第七条 会長、副会長並びに監事は総会において推挙する。理事並びに幹事は会長が委嘱する。

第八条 役員の内任期は二カ年とする。但し再任をさまたげない。

第九条 会長は、会務を総括し、本会を代表する。副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代理する。

理事は会長・副会長と共に理事会を構成し本会を運営する。

幹事は会務の執行に当たる。監事は会計を監査する。

第十条 本会に顧問をおくことができる。顧問は理事会にはかつて会長が委嘱する。

第十一条 本会の会議は総会・理事会・幹事会とする。総会は年一回会長が招集し、会則の変更・予算・決算・事業計画・役員の変更・その他重要事項を審議する。

第十二条 本会の会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終わる。

附 則

本会の会則は昭和六二年四月一八日から施行する。

諸新聞等に掲載した会に関する記事や紹介

掲載記事については各新聞社許諾済・複製禁止

朝日新聞 1976年(昭和51年)10月6日



「米沢本 百人一首抄」を復刻

米沢古文書研が出版

山形県米沢市の米沢古文書研究会(下平才次会長)はこのほど、米沢市立図書館蔵「米沢本百人一首抄」の原寸大複製版と解説・注釈版の二冊セットを出版した。藤原定家筆の百人一首はその後二巻、京極、冷泉の三系統に分かれ

て伝えられてきたが、米沢本は、冷泉系ではないか、とみられている。しかし、まだ研究が進んでいないため、複製版を多くの学者、研究家の前に出し、米沢本の本格的な研究の源にしたい、と同研究会は言っている。

この米沢本は、同研究会精成十周年を記念して出版されたもの。現在の会員数は三十人で、これまでに上杉家関係の古文書の解読、出版などを続け、郷土の発展に尽くしてきた。

米沢本は、享徳元年(一四五二年)に写本したもので、「林泉文庫」「伊佐原兼古書堂」の朱印があり、年代的に見て、当時米沢を治めていた内江兼統の家臣が原

出版された百人一首の米沢本
 ■米沢市立図書館で

 本から写したのを兼統の禪林文庫に収め、その後藩校興讓館に保存、林泉文庫・市立図書館と移ったと見られている。

藤原定家筆の百人一首は、その内容が超一流のものばかりだったことから、一冊の中では原本の歌を写し、注釈をつけた「百人一首抄」というのが数多くつくられた。その後、歌学は定家の孫たちの代に二巻、京極、冷泉の三家に分立した。現存する最古の写本は、応永十三年(一四〇六年)の「応永抄」(京極系)で、ほかに二巻系があるが、残る冷泉系ものは発見されていない。

なお、同市立図書館(米沢市外の内、瀧脇総合文化センター内)で電話〇三三一・二一六(一一)では、この米沢本を希望者に「セット」二千三百円で売っている。

古文書の解読技術を身につけた郷土史の理解を深める

古典、郷土史への理解を深める

米沢古文書研究会 (米沢市)

昭和60年 1月19日 読売新聞

古文書の解読技術を身につけた郷土史の理解を深める

古典、郷土史への理解を深める

米沢古文書研究会 (米沢市)

昭和60年 1月19日 読売新聞



古文書の解読に情熱を燃やす会員たち

昭和60年 1月19日 読売新聞

古文書の解読技術を身につけた郷土史の理解を深める

古典、郷土史への理解を深める

米沢古文書研究会 (米沢市)

昭和60年 1月19日 読売新聞

古文書の解読技術を身につけた郷土史の理解を深める

古典、郷土史への理解を深める

米沢古文書研究会 (米沢市)

昭和60年 1月19日 読売新聞

昭和60年 4月11日 山形新聞



かたしてとある
る「上杉」の
た、会員が各自
に郷土史研究に
も取り組む。今
米沢市立図書館
の「上杉」が
族の文藝史を
自伝的、生
なり、研究論文
を著大成して
語を導いた。

「上杉文書」など読む

米沢古文書研究会(今)は、昭和四十一年に
り、郷土史の発展を期し、毎月、郷土史の発展を期して、
古文書の解読技術の普及を期して、郷土史の発展を期して、
郷土史の発展を期して、郷土史の発展を期して、

郷土史の発掘
解明にも足跡
米沢古文書研究会



生涯学習のモデルに

ユニークな活動20年

一方、初級コースは、郷土史の発展を期して、
多岐にわたる活動に力を入れている。毎月、郷土史の発展を期して、
郷土史の発展を期して、郷土史の発展を期して、

米沢藩士の登山紀行



米沢古文書研究会の発刊二十周年を記念して復刻出版した「飯豊の山ふみ」

歌や漢文織り込む 風景など自在な筆遣い

米沢古文書研究会(上杉藩会)は、発刊二十周年を記念して、江戸時代後期の米沢藩士が飯豊山を歩き回った「飯豊の山ふみ」を復刻出版した。

「飯豊の山ふみ」は、文政7年(1824)から、天保11年(1840)年まで、米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。

「飯豊の山ふみ」復刻出版

発刊30周年を迎えた米沢古文書研究会

米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。

米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。

米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。米沢藩士が飯豊山を歩き回った日記や手紙、歌や漢文を織り込んだ。

平成8年12月14日 山形新聞

ニュース

謙信公直筆の 三手本を復刻

の研
沢書
米古文



20周年を祝い復刻された手本

「酒風手本」は、やはり最勝公に書写されたもので、消し文(手紙)に常用する筆跡や慣用句の類を列挙。「上杉家系中」(天正五年)は、下りの武将の名

な書体で戦国大名は「二」の所収。古文書研究会では、十周年の時に米沢本「百人一首抄」を復刻している。今回の原手本は三本そろえており、また、故上村良作元興立米沢女子短大学長、遠藤精一郎同短大教授、長谷部善作同研究会副会長がそれぞれ執筆した解説が添えられている。限定二百部、六千円。

・七、横九七・三の折、本、善子の最勝公の手書いのため目録し、永禄五年(一五六二)に書き送ったと伝えられる。「いろは」のそれそれに、その首に用いる漢字七十九字ずつ書き、音のほかに、訓読みも書き添えており、辞書的な要素を備えている。

謙信公は幼少のころから書に親しみ、その後は上洛の折に、公家である近衛権家から学び、書道師の流れを受け継いでいる。オソトックス



昭和59年2月1日 広報よねざわ
「カメラさんぽ」

編集後記

◆皆様の古文書研究会に寄せる思いに感動し、生涯学べる事の喜びと勇気を頂きました。この記念誌の温もりが古文書研究会の原動力となり、益々の発展を信じています。
(岩槻 代寿)

◆この度の記念誌の意義をご理解の上寄稿頂き心からお礼申し上げます。皆様の原稿等を拝見し委員一同多彩な内容に我々も今一花の思いを強く致しました。今後共交流を深め米沢古文書研を末長く見守って下さい。皆様のご自愛を祈念致します。
(斎藤 武)

◆平成十七年より本屋に就職し、毎月の勉強会も参加できず心苦しかったのですが、この記念誌のお手伝いが出来てうれしかったです。
(佐藤由美子)

◆四十年の歴史を編むのは大変でしたが、なつかしく楽しい作業でもありました。現・旧会員、役員の皆さん、永井印刷さん、ありがとうございます。
(植木 伸子)

◆今回は恒例の復刻本の出版は出来かねましたが、その分、記念誌作りを力を入れました。お読みいただければ幸いです。(遠藤綺一郎)

この人たち ———— 米沢古文書研究会



会員募集中 年会費2,000円(テキスト実費)
例会 毎月第三・第四土曜日
連絡先/市立図書館 横木さん ☎21-6111内線719

米沢古文書研究会(上杉虎雄会長・会員五十人)は、昭和四十一年の発足で、上杉家武将文書を解読し郷土の歴史を勉強しているほか、古典の文学作品に接し、古文書に親しむ同好の会です。会員は市内はもとより置賜一円や上山からも通ってくる熱意ある人たちがばかり。「古文書百遍意おのずから通ず」のように何回も目を通していらっしゃるという信念のもと、楽しみながら学んでいます。古文書の解読ばかりでなく、研修旅行や学煮会などを行って更に、親睦を深めています。

平成4年10月1日 広報よねざわ
「この人たち」

四十周年記念誌

古文書とともに

2006

発行日 平成十八年十二月二十六日

発行 米沢古文書研究会

事務局

市立米沢図書館

☎〇二三八―二一六―

印刷 永井印刷

(H19)
107/12/26 いそは 塾
1=2丁 塚く

H20.4. ~ 入会